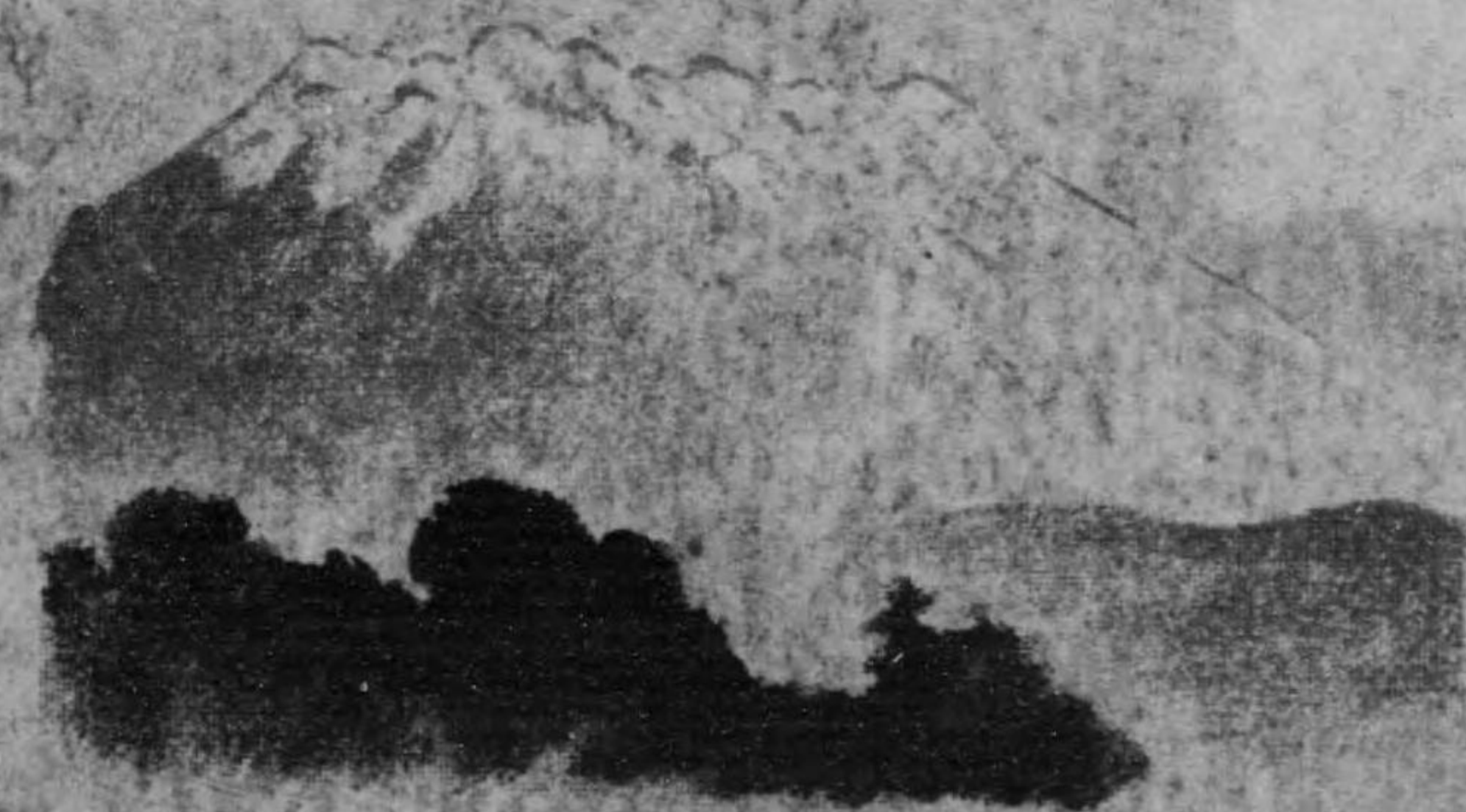


始







我 が 書 翰

五 十 嵐 力 著



71-53



翰

五十嵐

力著







✓  
序

此の書は私がこの兩三年來人に上げた手紙の古物ふるであります。  
一度或場合に、或御方に對する用務を果たして、屑籠の中、抽出の底に葬られたのが、今度はからず、有縁の皆様みなさまに廣く御目にか  
かる爲めに甦つて來たのであります。

是等の手紙は、無論私が此の兩三年間に書いた凡べてではあり  
ません。第一に自他に差障りのある秘密性のものを除き、第二に  
誰れにも興味なき機械的きかてきの用足物もちものを除いて、あとに残つた無障礙



の、同時にいくらか情趣を含んだのを集めたのが是れであります。情趣を含んだものでありますから、筆を取つた當時には、いづれも、活きた事實にぶつかり、極つた相手に對して、笑つたり、泣いたり、感激したりして書いたものでありましたが、一度役目をすまして情の冷めた今日に之れを出して見ると、何だか時過ぎて後の思ひ出し笑ひ、思ひ出し泣きを、無關係の人に見られるやうな極りわるさを感じます。しかし此の「きまりわるさ」の中には、恥かしさと共に一種の温かい慰めをも含んで居りますので、人の勧めに従つて、遂に此の輝かしい公刊を敢てすることになりました。

但し私は、手紙は人生の眞面目なる一種の事務で、同時に眞面

目なる一種の藝術だと考へて居ります、従つて根本に於いて談話や演説や著述と違ふものでないと思つて居ります。此の書を公刊した趣意の一面は、こゝにあります。

名宛の御方の御名前は、或特別のを除いては、わざとあらはさぬことに致しました。

巻末に附録として此の一二年間に書いた日記、漫筆の數篇を添へました。御序に御一讀下されば有難う存じます。

著 者



## 序に添へて

著述は演説のやうなものである。手紙は對話のやうなものである。親展極秘の手紙は親友戀人間の秘密話のやうなものである。

人は心である。心を詞にあらはし、紙に寫して、或人に宛てたものが手紙である。手紙はアドレスである、←である、特別なる人の心と心とを繋ぐ橋掛りである。

人の云爲行藏は、之れを封じて宛名を書けば悉く手紙となるべき



ものである。手紙は人の生活そのものの寫して、人生の最も眞面目なる一部分である。

「はるかなる岩のはさまに獨りゐて、人目おもはで物おもはゞや。」沈黙は金である。世に無言、自足、自照、ぎやうけん 凝念の意味深さに比すべきものがない。此の一念を特に或一人に示したものが手紙である。衆人の前に公開したものが著述であり、演説である。

人の心は、之れを示す相手が多くなり、場所が廣くなるに従つて、その香氣がますます稀薄になり、其の風姿がますます餘所行きになつて来る。

感情が高まれば、詞の調子が低くなる。手紙の文はなみし 袷を着るほど命がなくなり、文字選みをするほど力がなくなる。

手紙は其のまゝなるほど面白い。巧みにして練つたのよりは拙くして樸こな方が面白い。解る限りは塗抹添削の跡あとのそのまゝ残つてゐる方が面白い。清書や推敲は手紙には禁物である。手紙に於ける不用意の書き損じ、文法違ひ、これほど床しいものはない。

直接ぢかに話せば面白いが、手紙を見ては一向面白くない人がある。是れは、其の人の心が突發的、火花的、断片的、兎藪的に發露するに適した人である。直接に話しては一向面白くないが、手紙を見る



とたまらなく床しい人がある。これは、其の人の心が、冥想し整理して組織的に表現さるゝに適した人である。

直接に話して面白く、手紙を見て更に床しくなる人の交りは金織である。が、是れは百に一つもない。手紙や著述で慕った夢の直話に醒める、是れが世の中である。

「心の問はゞいかゞ答へん」と、古歌にもある。「いろは」から「ふひもせず」まで、徹頭徹尾偽り欺くことのないものは「心」である。

「目」は多少偽り欺くことを知つて居る。「口」は更に多く偽り欺くことを知つて来る。「文字」は更に多く偽り欺くことを知つて来る。

文字の中でも、手紙には私人的の用心深いブルーテントな道徳が行はれて詐偽的分子が比較的少ないが、普通の著述になると、國際關係同様に、詐偽惡徳が白晝公然と美裝して跳躍して居る。

他に示し得るは二位三位の手紙である。親しい同士の極秘の通信が、どうしてたやすく人に示されやう。少なくとも常人相方の生きて居る中は。

「おとづれ」たより「手紙」「玉章」「水壺」「書翰といふ事をあらはす世界の諸國の言葉の中で、我が國のが一番優しく、意味深く、情々しいのがうれしい。



大正五年一月五日

著者

目次

0 序…………… 序の一

0 序に添へて…………… 序の五

旅より……………

信濃路……………

上諏訪の停車場より

浅間の温泉より

木曾より

宮越より

1



參 宮……………三

太廟を拜みて

朝熊岳の頂上より

豆腐屋より

豆腐屋を發たんとして

鳥羽より

阿蘇山より……………三

家より……………三

郷里に滞在中の子供に(其の一)

同じ子供に(其の二)

同じ子供に(其の三)

阿蘇の麓なる友に

伊勢より歸りて友に

信濃路に旅せる友に

よろこび……………五

習志野の友に甘藷の御禮

守口大根糟漬の御禮

青豆粉の御禮

白味噌「雪山」の御禮

高麗雉子一番の御禮



丹波栗及び干柿の御禮

鎌の御禮

白豆黒豆の御禮

もとの女中せん女に

肥後の友に玄米の御禮

熱海なる老師に

寫眞撮影の御禮

信州の姪に年始

同じ人にお産の祝

高工を卒業した甥に

農科大學を卒業せる義弟に

近親の若者の結婚を祝ひて

姪の夫なる人に

さまざま

驅逐艦「白雪」なる甥に

札幌の友に

阿蘇山中枿の木温泉より軍艦なる甥に

鎌倉なる松聲濤聲莊の友に

元の女中とよ女に

學生相撲への出場について同郷の中學生に



おとづるゝ約ありし友の來ざりしに

去年訪ひし紀念日に

春雨庵主に

横須賀なる甥に

大阪なる友に

高麗雉子の御馳走に招く

梅雨のころ插花の先生に

竹馬の友へ悔み狀

その日く……………二六

船なる甥に

若き農友に

其の一 穴 居

其の二 新 緑

其の三 粟 三粒

其の四 睡 蓮

其の五 みそさゞい

其の六 孟 宗

其の七 梅 雨

其の八 金 魚

軍鑑なる甥に



留守におとづれし友に

乳蜜郷牧場主に

犬の下痢どめの問合せに答ふ

玄米の御飯の炊き方を問はれしに

宮城縣角田の友に

五色温泉に湯治中の友に

角田の友に

三保の松原に滞在せる友に

御即位式の當日をいかに過すかと問はれしに

御大典の翌日友に

柿

○秋の九日

雀と「伊藤博文」

山茶花と百合と「東郷」

雨の足と「白」の趣味

文展と空也

柩を送りて

天下の亂れ

青島陥落と竹馬

紅葉のいろく



生まれ變はつて

〇 浮

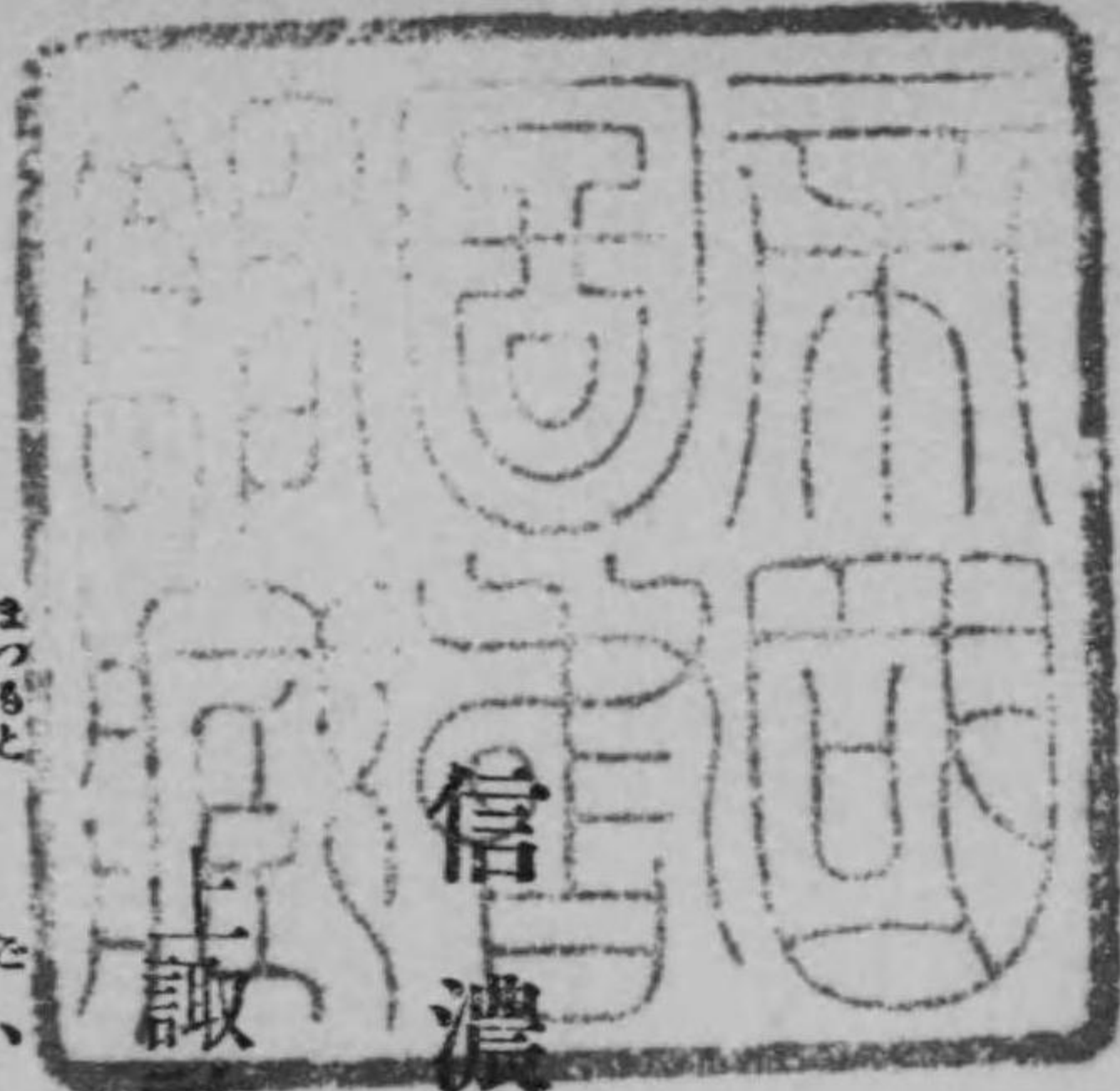
花

三三

目次終

# 我が書翰

五十嵐 力 著



信濃路

諏訪の停車場より

1 松本へは午後の四時六分着の約束であるから、途中で五時間位遊んで行つてもよい。何處で遊んで行かう。甲府か、諏訪か、



鹽尻かと考へた末、到頭湖水と古い社とのある、傳説に富んだ  
諏訪に引かされて上諏訪に降りることにしました。上諏訪神社  
まで往復七十五錢で人力を雇ふ。仕合せとおシャベリの車夫で  
あつた。(奈良で案内した車夫に負けぬ位のおしやべりである)  
右手後ろに湖水を望みつゝ、引ッ切りなしにシャベるのを聞い  
て行く。

「車屋さん、湖水を見晴らすには、どこが好いかねえ。」

「さうですな。近い處では公園のお天主跡ですが、左手の山  
の中腹の地藏寺でいふなあ素敵ですなあ。高みにあつて、  
岩石の岩の間から冷たい清水が湧きましてな、夏の盛りに

あ、東京邊からもよく避暑を避けるに御出でになりますあ。」  
面白い。早速例の安手帳と子供の使ひ捨てのチビ鉛筆と  
を出して、「岩石の岩の間」「へキ暑をさく」と附けとめた。また  
のろくと喋舌りながら引いて行く。

「車屋さん、此の邊から名高い高山が見えるかね。」

「エ、く見えますともな。八ヶ岳に穂高岳、それから飛騨  
の高山も見えます。富士山も見えます。晴れて居ますと、

此の正面の山の間からな。エ、く……

左に一寸景色のよい松山がある。

「此の松山は何ていふんだね。」



「エ、此方の松山ですか。何とか云つて松茸のよく出る山ですよ。」

「右の方のあの高いのは何ていふんだい。」

「何、あれですか。皆有合せの小山でさあ！」

海拔五千尺もあらう、可なりに高い山であるが、海拔三千尺以上の高臺に住んでゐる信州の車夫が五千尺の高山に驚かぬのも無理はない。「有合せの小山」は面白い。我が車夫よ、汝は詩人である。

五千尺の山の名問へば車夫曰く、

何有合せ小山さうらふ。

私は此の車夫の話を坪内先生の講義を聴くやうに面白く聞き惚れつゝ二里の道をいつしか上諏訪神社に着きました、そして同じ二里の道を又いつの間にか停車場に着きました。而して始めに車代を値切つて負けさせようとしたのを、恥かしげもなく足前までして、此の車夫の名譽ある饒舌に酬いました。二枚つゝきの繪はがきを書いたのは、生まれてこれが始めてす。(九月二十六日)

### 浅間の温泉より

上諏訪神社に詣つてから湖畔の公園にまゐり、湖中に突き出



てた高島城の天主跡から、秋風に連立つ湖の彼方に、赤い、白い、黄色い製糸工場や煙突の花やかに並んで居る西洋まがひの景色を賞し、白雲の切れ目から見え隠れする四方の連峰の雄々しき姿を眺めつゝ、停車場に歸つて、やがて車中の人となり、豫定の四時六分に松本に着きました。すぐ女子師範に行つて先生方の討論を拜聴し、夕方から松本樓の宴會に臨んで、十時少し前に當淺間温泉の西石川といふ宿に着きました。それから玉のやうな温泉につかつて車中二日の垢を落とし、幾年ぶりて二次會の御馳走にあづかつて、十二時に床に着きました。

朝五時半に起きて顔を洗ふ。すぐに二階の雨戸を開いて眼を

放つと、直ぐ下には女鳥羽川の優しい流れが銀蛇のやうにうねつて、其の向うに黄金色の十里の野が遙かに展開して居り、而して目路の窮まる所に、日本アルプスの連嶺が屏風のやうに立つて大濤を打つて居ます。吾妻、飯豊の麓に二十年を送つた私も、これにはさすがに目を睜つて其の雄大なる莊嚴美に打たれざるを得ませんでした。

日の本の山の威力をあつめたる

大濤男々し日本アルプス。

是れから朝飯をすまして松本に行くのです、そして先づ松本城趾の天主閣に上り、高山國の秋の眺めをほしいままにして、



それから學校に行くのです。(九月二十七日)

### 木曾より

昨日の夕方松本を發つて十時過ぎに福島につき、岩屋といふ宿におちつきました。

木曾の今朝の寒さは身を切るばかり、寒暖計を見て貰つたら四十二度と申します。御嶽にはもう一尺ばかりの霜柱が立つて昨日は雪が降つたと申します。外套なしの夏衣、背中と膝に新聞紙などをあて、鳥膚の腕を撫てつゝ見物に出かけました。福島から流れに従つて棧を経それから寢覺にまゐりました。流れも

清い、岩も面白いが、それにもまして美しいのは蟲々と競ひ立つた五木の緑です。木曾の人は「美林」と云つて居りますが、此の美林が右は御嶽の方に、左は駒ヶ嶽の方に何里も續いて、奥に入るほど益々美しくなると申します。木曾は木の都です。

木の都五木盡々雲に入る。(九月二十八日)

### 宮越より

土地の教育家諸子の親切な御案内により、棧、寢覺、旗上八幡、南宮神社と滞りなく見物して、只今木曾殿開基の德音寺に落着きました。是れから木曾川名代の鯉で村長手塚氏はじめ皆様御



厚意の御酒を戴くところてす。

木曾は御嶽、駒ヶ嶽の山裾の合した所で、極めて清い氣持のよい谷間です。私は木曾殿や芭蕉の遺跡を夢心地に辿りつゝ、いろ／＼な事を考へました。木曾に義仲と芭蕉とがあるのは、赤壁に曹操と蘇東坡とがあるのに似て居ると考へました、殊に其の地に大業を企てた英雄に比べて、風來の一詞人の、長く、深く、親しく記憶されてゐるところが更に似て居ると考へました。義仲對巴御前の關係は項羽對虞美人の關係に似て居ると考へました。平家討滅事業の中心が義仲、義經、頼朝と移つたのは、足利末の戰亂戡定事業が信長、秀吉、家康と移つたのに似て居る

と考へました。而して義仲は其の性格事業のいづれかに於いて項羽、曹孟德、信長に似て居ると考へました。

「木曾宣公舊里碑」が旗上八幡わきの秋草離々たる畑の中に立つて居るのは、奈良の大極殿跡を小形にしたやうな所があつて、云はれぬ感じてあります。

残草離々木曾殿の碑や秋に泣く。

南宮神社では社司の某氏から書きませ帳を出して、何か書けと強ひられ、否みきれずに、例の安手帳を出して、

旭將軍は木曾の仰げる姿なり。芭蕉は木曾の俯せる姿なり。五木の空に沖つて蠢々たるは旭將軍が疾風枯葉の邁進



に似たるにあらずや。棧道の下の碧くおどめる淵は芭蕉が  
わびしくをのける心を現はせるにあらずや。意味深き木  
曾よ、汝は木曾の人の心なり、日本國民の心なり。  
など下書して見ましたが、初めの二句だけ書いて責をふさぐこ  
とにしました。

木曾の樹木の美はいかに稱へても稱へ過ぎることが出来ませ  
ん。

木をめぐる心すさびて大木曾や

木曾の五木とわれならんとす。

(九月二十八日)

## 参 宮

太廟を拜みて

俄かに参宮を思ひ立ち、昨七日の夕八時に東京を發つて、今  
日の十時に山田に着きました。まづ外宮を拜んで次ぎに内宮を  
拜みました。兩宮の神々しさ、殊に内宮の畏さは言語に盡くせ  
ません。五十鈴川の清き流れに水底の小鮎の數を讀みつゝ、恭  
しく口嗽いで、それから頭上の木の枝に猿の遊ぶのを見、名も  
知らぬ鳥の奥深く啼く音に耳を澄ましつゝ、緑青色の苔にさび



た神杉の太い幹が、天を支へる柱のやうに立ち並んで居る間を  
 辿つて暫らく進むと、やがて木立の奥、塀の彼方に千木堅魚木  
 の金色が拜まれます。更に進んで塀の内に入ると、正面の御門  
 には白布の垂幕が長く地に曳いて静かにそよ風に揺られ、其の  
 奥に疎らに立つた神杉に護られて、御白石のびっしりと敷きつ  
 められた間に、神々しい白木の御宮が拜まれます。私はまづお  
 白幕の手前の石段の下に跪いて小さき祈りを捧げました。而し  
 て傍らに並んでゐた老爺老婆が柏手を打つては溜息まじりに高  
 聲の祈願を繰返すのに聞き入りながら、現の間に西行法師が、  
 かたじけなさに涙をこぼして額づいた小さき敬虔な姿を思ひ浮

べました。ついでステッキでお白幕を掲げたとかいふ森有禮  
 を思ひ、憲法發布の当日に此の無禮漢を誅した西野文太郎を思  
 ひました。

御事はかしてしわれら神杉に

みもすそ川に涙おとすなり。

四十二歳はじめて祈ることを知る

かしこくもあるか、伊勢の大神。

堅庭を蹴はら、かしたまふあら神の

この森のうちに鎮まりますも。

直き清き強き心をあらはして



すくく立てり、たふと神杉。

太廟は「單純」といふものの偉大さを極度に表現したもののやうに拜まれます。而して此の御社の神杉は樹木の神々しさを極度に現はしたもののやうに思はれます。

私共は内宮の御後ろの神杉の根方から一片の苔を戴いて懐ろにし、みたらし川に口すゝいて、折しも聞こゆる笙箏の幽寂な雅樂の音に送られて、此の神境を辭しました。而して願み願み宇治橋を渡つて、昭憲皇太后のめて聞食したといふ赤福餅に腹をこしらへ、それから車を命じて田甫路の五十九町を志摩境の名山朝熊岳に走らせました。

御社のうしろの御門をろがみて

一かけの苔をいたゞき歸る。

神路山の御陰を浴び、御裳濯川の流れに肥された田甫路を車に揺られながら、私は此の神境が大神の大御心に叶うた故由を考へました。『大神宮儀式帳』に

度會の國は朝日の來向ふ國、夕日の來向ふ國、浪の音聞かぬ國、風の音聞かぬ國と、弓矢鞆の音聞かぬ國と、大御意鎮まります國と、悦びたまひて、大宮定め奉りき。

とあるのを見れば、第一には山水の景色の類ひなさを愛てさせられたのであらう、第二には地勢氣候風土のうるはしさを愛て



させられたのであらう、第三には此の土地に永久なる平和の可能性のある事をめてさせられたのであらう、最後には一切の消極的煩累にわづらはされずして、皇御孫に率ゐらるゝ大和民族の積極的光明的發展を見そなはずに都合のよい、氣の落ちつく境と思はせられたのであらう。など考へつゝ、折々車夫の饒舌に氣を轉じて居る中に、いつか朝熊岳の麓につきました。朝熊岳は、天照大御神の御杖代として、神路山、五十鈴川の神境を定め給うた倭姫命の御心になうて、しばしば訪ひ登らせられ、遂に此の山にて終らせられたといふ尊い歴史のある名山、昔から兩宮の參拜を表參宮と呼び、朝熊の登山を裏參宮と呼ん

て、此の山に詣てぬを片參宮と云つた程の由緒のある名山、聖徳太子、聖武天皇、弘法大師、其の他の聖達の靈跡に神さびた名山、わづか二千尺の高さながら五六千尺以上の高山の面影を具へた名山であります。

### 朝熊岳の頂上より

昨日麓から二十二町の險路に身體中の汗を絞つて、頂上の一軒旅館豆腐屋に着いたのは、午後の四時半頃でありました。すぐ一浴して「十八亭」の一室に案内されました。「十八亭」は山鼻に建てられた涼臺式の離家で、そこから伊勢、志摩、紀伊、



尾張は云ふに及ばず、秋冬の晴天には、澄んだ空を透はして遠く富士、箱根より駒ヶ嶽、御嶽、乗鞍、立山、白山まで都合十八ヶ國を一目に見渡し得るので、かくは名づけたのであります。私共は欄干に倚つて、泡立つ麒麟に額の汗を拭ひつゝ、勢志尾参の山々が、丘となり、平地となり、岬となり、島となり、岩となつて白く光る大浪の間に影を没し、谷々の流れが小川となり、大河となり、浦となり、内海となり、大洋となつて、遂に海の彼方の地平線の雲煙模糊の間に融合する光景に見入りつゝ、しばらく我れを忘れました。朝熊の眺望は「奇怪」「威壓」「莊嚴」の趣致に富んでは居りませんが、穩かな心しづまる景色

としては、廣く變化に富んでしかも統一のある景色としては、實に天下の一品だと思ひます。

夕餐をすますと、今迄の晴天が俄かに掻き曇つて恐ろしい暴風雨となりました。狭霧は軒を壓して窓外咫尺を辨ぜぬやうになり、しぶきは谷の方から吹き上げて来て、南の縁側から北の縁側まで吹き抜けます。私共は山靈の嚇怒を畏みつゝ、雨戸を締め切つて、家を揺る風の響、瀑布の如き雨落の音を聞きつゝ、わびしく山上の一夜を明かしました。

今朝は朝日と共に、本堂奥の院に詣て、直ぐに山を辭して二見に向かふつもりでありましたが、夜半の風雨が更になどむ氣



色が見えませんが。止むを得ず、一日逗留と覺悟して、飲んだり、食つたり、謠つたり、話したりの室内遊戯で、外面の暴風雨の向うを張りました。

たまさかの旅なるものをあらし哉。

雨の旅ポツ然として晝の飯おもふ。

朝熊山野分山分と申さばや。

大あれや夜半に目ざめて子を思ふ。

久方の雨の力を知れよとや

十八州をやみに降るかも。

風雨にさいなまれつゝゆくりなく

あらしの山をめてにけるかな。

雨一日菓子くだものを食ひあきて

萬金丹を思ひ出だしけり。

正午少し前に宿の主人が小さな井守のやうな者を提げてやつて來ました。何だど聞くと、山椒魚と云つて、根の薬、精氣の薬になるから食べて見ないかと申します。「それは珍らしい、戴かう。」と云つて、早速つけ焼にして味はひました。若い唐もろこしに醬油を附けて焼いたのにそつくりの味なので、これから唐もろこしの附焼を「山椒魚もどき」と云つてはどうだらうと云つて笑ひました。



山椒魚の味噌もろこしに似たりけり。

天氣見の名人だといふお爺さんに聞くと、今度の荒れは風並  
がわるいから、いつまで續くかわからないと云ふことです。弱  
りました。全く弱りました。

豆腐屋より

雨降りやしよさいなさに、宿から諸本を借りて「かの海底に  
飛び入れば、空は一つに雲の波、煙の波をしのぎつゝ」「春霞た  
なびきにけり久方の、月のかつらも花や咲く」など、出たらめに  
すさび居り候處、風はそのまゝながら、空は少し明るく、小降り

になり來たり候。(突然の「候」式變化に一驚を喫したまふべし、  
不純蕪雜御一笑願上候)「よし來た」と、すぐ借着の浴衣のツンツ  
ルテンに足駄を穿いて、本堂奥の院詣てに出かけ候。本堂は十町  
の奥にあり、奥の院はそれより更に三丁の奥にあり。海拔は豆腐  
屋と同じ位、或は寧ろ低き位に候へども、入るに従つて歩々に  
深山の相を備へ來たるは不思議に候。三四丁行きたる道の左側  
の谷間に老杉數幹道を壓して立てるあり。太さはやうやく二抱  
位に候へども、青苔にさびて陰森の氣を漲らしたる様、木魂て  
も棲みさうに見えて物凄く候。かねて御心掛の莊嚴雄偉なる神  
杉の畫のモデルなどに然るべく候はんか。それより行く道すが



ら、處々に一二間の小櫻樹を植ゑあり、それに木札を下げて「此の木を愛して下さい」と書き、下に「△△村小學校何年生何某」と書きたり。一寸面白く、注意を惹き候。

六七町行きたる左の曲り角に有名なる朝熊萬金丹の本舗あり。石堀をめぐらし土藏を建て並べたる體、いかさま鎌倉室町時分の田舎豪族の住居らしく、御曹司に便られ、熊坂に襲はれさうに見ゆるも面白く候。

本堂、三ヶ月堂、奥の院、皆見るべし。殊に奥の院の山鼻に築き出だしたる舞臺（京都清水の舞臺の如き）より見渡したる森林の美は海内無類、木曾を措いてかゝる美しき森林を見たる

こと無之候。

行きは先づく無事に候ひしが、歸りには、數回車軸式屏風倒し式の大暴風雨に襲はれ、びしょ濡れになつて路傍の寺の軒下や萬金丹屋の御保護を乞ひつゝ、辛うじて無事に歸着致し候。一浴して雨濕の悪寒は免れ候へども、慢性式の強雨には氣の晴れやうも候はず、そゝろに家が戀しく相成候也。

豆腐屋を發たんとして

夜中降りつゞけ吹きつゞけて、今朝もまだ晴るべしとは見えず、しかし今日は仕方なし、駕籠でも命じて是非とも下山せん



と覺悟致居候處、立ち際になりて、雲は幕を引くが如くに晴れ、それと共に風伯雨師忽然として影を收め候。是れより二見に行き、鳥羽に行き、島めぐりしてそこに碇泊中の軍艦を訪ふつもりなりしが、その軍艦の十幾隻、さやかに眼下に望まるゝは何たる天祐に候ぞや。うれしさに覺えず山靈を禮し候。

朝立ちの晴れよ朝熊に禮しけり。

晴れの朝熊はまたも見るべし、暴風雨の朝熊はめつたに見るべからず。稀有の山荒れに逢ひたるも、過ぎて見れば山靈無上の恩賚にぞ候ひける。

### 鳥羽より

朝熊の山麓より車上十數町の洪水を乗り切り、雨揚句の烈日に照らされつゝ二見に行き、名高き夫婦岩を一見致し候。形奇ならざるにあらねど、餘りに小さく、餘りに陸近く、餘りに人工を加へ過ぎたるは、かねて期したることながら、期したるにもまさりて甚だしく、一笑して歸途につき候。夫婦岩の前後、之れに優れる景致は海に陸に少なからぬを、夫婦岩を招牌にしたる爲め苦笑せらるゝは、此の勝地の災難とも申すべきか。

吾等は二三の土産物を求めて、すぐに停車場に引返し、鳥羽に



まわり舟を織ひて、小さき夕立が思ひ出したやうにポツ／＼する間を暫らく島巡りし、最後に軍艦の知人を訪ひて歸途に就き候。鳥羽の島めぐりは盆景を擴大して其の間を縫ひ行くが如し。雄大の致は缺けたれども雅麗にして變化に富めること、二見などの比にあらず。殊に海上より陸の山々を仰ぎ見る所に別種の眺めあり。大凡そ風景の觀賞は裏返しするを要す。高さより低きを見れば、更に低きより高きを見るべし。山より海を見れば更に海より山を見るべし。朝熊岳と鳥羽港とに於いて、計らず此の裏返しをなすを得たるは實に思ひ設けざる仕合にて候ひき。これよりは歸途に候。やがて御目に懸かるべく候。以上。

### 阿蘇山より

今日いよく阿蘇登山を致しました。朝の六時に栃の木温泉を立つて、十一時少し過ぎに山上の阿蘇大権現の社前に着きました。それより上ること二十餘丁にして世界一の大噴火口に立つのであります。此の大噴火口を護つて周圍に立つて居る外輪の山々は、概ね緑の矮草を纏うて、滑らかに撫肩うるはしく見えませんが、其の間を通り過ぎて、大火山口の縁に立つと、光景がまるで一變してまあります。磊々たる赭色の火山壁に白ちやけた筋の幾つも通つて居る所は、地球といふ大きな動物の身を切



つた横断面を見るやうな氣が致します。徑十餘丁深さ六十幾間といふ大火口の底に五つの熱湯湖の横たはつてゐる處は、地獄の庖厨かとも思はれます。

私は此の大噴火口を見て、天地の實に大きく、人間の實に小さい事を知りました。今まで見たことのない「恐ろしい尊さ」といふものに接しました。

やがて下りについて、無事に柵の木に着いたのは五時半でありました。非常に偉いものに接したあとの心は、いまだにぼうツとして居ります。

## 家より

### 郷里に滞在中の子供に (其の一)

度々手紙をくれてうれしい。お前方が立つてから、家の中はピンカラリン、まるで大風の吹いたあとの様で、鼠に引かれさうな淋しい日を送つてゐる。あの小坊主(お前の事)を、淋しい時だけ取りよせて、傍において、やかましくて困る時に、電氣仕掛で國へ送つてやれたら、よからうなどと云つては、生きた人間が、まさかさうもなるまいなんて、馬鹿話をする事も度々ある。



親類まはりや、山登りや、温泉あるさや、水泳ぎや、魚釣り  
 て大分忙しい様子、結構だ。好い空気を吸つてうんと遊ん  
 で、是れから一年の間勉強する元気を養つて来るがよい。但し  
 其の間に朝一二時間の数学、英語其の他のお稽古、これは是非  
 ともやらねばなりませんぞ。

お墓参りに行つたら、よく御寺の様子を見て来て、歸つてか  
 ら報告なさい。先祖様のお墓、お祖父様お祖母様の御墓には、取  
 りわけ立派に御辭儀をしていらつしやい。それから謙信公の上  
 杉神社、鷹山公の松岬神社へも是非参詣して、尙ほお婆様達か  
 ら謙信公鷹山公のお話をよく伺つていらつしやい。それから若

し暇があつたら、御廟山に参詣して、上杉家の御廟所の左手の  
 前に、今から百數十年前の御祖父様—鷹山公に御奉公して家の  
 先祖様達の中で一番立身したお方—の献納なすつた石の燈籠が  
 立つて居り、それに其の御祖父様の名と献納なすつた年月とが  
 刻んである。それを見て我家は米澤藩の中でも卑しい家柄では  
 なかつた、吾々も先祖様達の御顔をよこしてはならぬといふ事  
 をよく考へていらつしやい。

もう明日は八月だ。もう二週間ばかりでお前に逢へると思ふ  
 と、中旬が待遠てならぬ。達者で歸つて来るんだぞ。よいか、  
 病氣をせずに、怪我をせずに、巢鴨の一六一六に歸つて、二の



間の蚊屋の中へお母様達と一しよに寝て、そして井戸に冷したサイダーを飲んだぞ。

このころ退屈まぎれに、こんな、歌のやうなものを作つた。「物はづくし」といふのだ。

四磨が居なくて淋しい〜といふ者は誰れ。

お母様〜。

坊ッちゃん居ないで退屈だ〜といふ者は誰れ。

空氣銃〜。

坊ッちゃん居ないで安泰だ〜といふ者は誰れ。

雀と蟬〜。

坊ッちゃん居ないでつまらない、死んぢまへといふ者は誰れ。

金魚〜。

どうだ、面白だらう。

あとは明日、左様なら〜。

同じ子供に (其の二)

はがき昨日着、大層面白く讀んだ。お前の手紙は一度毎に段々面白くなつて来る。これも新しい境にふれて、心がびん〜して居る處へ、書く事が澤山あるからであらう。「可愛い、子に旅をさせる」とはよく云つたものだ。作文のお稽古の



ためには、お前をお父様お母様の手から離しておくに限ると思ふよ。

お前はなか／＼察しがよい。お前の察しの通り、二人で毎日のしくお茶をのんで居る。しかしお前が居ないので、例ほどはうまくない。それに此頃はお茶やお菓子をやめて、しきりに真桑瓜を食つてゐる。昨日も五つ食べた。昔の歌に「瓜をたべて子を思ふ」といふことがあるが、食ふ毎にお前が居たらば此の甘露の味を分かつたうものと思はぬことはない。お前の歸京つて来る時分にもまだ、真桑があるだらう。其の時はビスミツト、萬金丹をそなへて監督しつゝ、しつかり真桑やバナ、を御

馳走するから、米澤ではあんまり、うて豆や瓜を食べぬやうにしていらつしやう。

馬場の町の皆様によろしく云ふのです。

お腹をこはさぬやうに、悪い事をしないやうに、別けてうそを云はないやうに、是れだけは一寸も忘れてはなりません。

お前のはがきが毎日来るのでうれしい。お前の便りは御菓子にも、真桑にもましてお茶うけにもなり、お酒の肴にもなる。

四鷹萬歳、左様なら／＼。

降りぬ、晴れぬ、照りぬ、曇りぬ、我がやろの

どこにどうして遊び居らん。



## 同じ子供に (其の三)

昨日は唐もろこしと南瓜の初もぎとを食べた。頬べたが落ちさうに美味かつたので、又お前の事が思ひ出されてしまつた。お前は米澤でこれよりうまいのを食つて居ることだらうけれども、お母さまが種子を蒔き、お前と一緒に植ゑつけて、肥料をやつて育てたのだと思ふと、お前に食べさせずに初もぎを食ふのが残念でたまらない。若い唐もろこしに醬油を引いて食べると、山椒魚といふ動物の焼肉そつくりの味がする。此の間此の前世界的珍動物の附焼を食べたので、話の種に報告するのだ。

毎日方々に呼ばれるさうで、無面白いことであらう。近い中に歸らねばならぬことだから、思ふまゝ遊ばして戴いて御歸りなさい。お父様お母様は早く達者なお前を迎へたいと思つて、夢にまで見てお前を待つてゐる。いつ歸るか、早く知らしてよこしなさい。サヨナラ。

## 阿蘇の麓なる友に

此の手紙をば大晦日の正午少し過ぎに書きはじめました。記念すべき大正三年も、もう十二時間弱を餘すのみとなりました。荆妻は今廣間の花瓶に松と梅の活花で一生涯命になつて



居ります。(此の活花は近い中に寫真にして御目に懸けることが出来るかも知れません) 私は午前屋内の掃除をすまし、これから屋外の掃除を始める所で、それまでの一二時間を書齋に籠つて、年内に御世話になつた方々へ御禮狀を書かうと思ひ立つて、まづ貴君へ上げるのから書き始めました。

御情のこもつた御手紙並びに奥様御手書きの、雪のやうな肥後本場日本一の白米一袋、一昨日有難く拜受致しました。例ながら御厚意、御禮の詞も覺えませぬ。頂戴の珍穀は今夕早速除夜の釜に炊いて、第一に佛壇に供へ、それから家族一同の健康を大正三年から四年につなぐ紀念食糧と致します。御蔭さまで除

夜の膳部も一層の深い味はひを加へました。厚く御禮申上げます。

今年は何といふ好運か、私共は数々の有難い經驗を得ました。その中私共の心に深く沁み込んで一番嬉しかつたのは、八月の十八日から十九日の朝にかけて送つた大井の二十時間でありました。改めて申すもいかけてすが、私共は生まれてからまだ、あのやうな温かいもてなしを受けたことがありません。實は、あの時には歸期が迫つた爲め、熊本市の見物と貴宅への音づれと、いづれか一つを選ばねばならぬ事となりまして、思案の末、遂に熊本見物を断念して、緩くり御邪魔を致したのでありました。



が、後になつて、よくこそあの時に御宅へ伺ふことにしたと喜んでのでありました。その後荆妻との茶のみ話に、一生の中に、もう一ぺん大井へ伺つて見たいと申すことが度々あります。大井の二十時間は誠に私共の生涯に通じての床しい思出であります。又之れにそへていつも考へる事は、あなたを甲鳥園の茅屋に御迎へ申したいこととあります。どうか然るべき機会を捉へて、成るべく近き將來に、三百里の東上の旅を思ひ立つて下さい。奥様御同道ならば更に結構です、御子さんをも御同道になれれば更に結構です。

こゝまで書いた時に用事が突發して筆を擱かねばならなくな

りました。そして元日二日は遂に書きつゞける暇を得ずして三日となりました。

除夜には豫期の通り御恵みの米を戴きました。而して雪のやうに眞白な香ばしい肥後米の御飯の副食物として、嘉例の借金<sup>○</sup>茄子干<sup>○</sup>、栗合よし、身上と壽命を延べる糸の長い納豆<sup>○</sup>、潔白長大を意味する大根汁などの外に、札幌の友人の送つて呉れた「新巻」といふ特製の鮭と、佐敷の友人から贈られた有明灣の眞赤な大海老とを並べました。そして「我家の膳部も日本大になつたぞ。」などと大きな聲で笑ひながら「高砂」を謠ひました。かくして清き心の人達の情ある贈物の有難味をしみじみと感じつゝ、



「今頃は△△さんの鐵火箸が火棚に休息させられて、栗の木の太い火箸が、代はりに爐に立つてるんだらう、明日の朝は白米の御ひねりが、此の夏我々の頻りに飲んだ井に入られるんだ。」などと話しながら、百八の鐘を聞いて、めでたく休みました。

元朝には、霜を見ず氷を見ずといふ、私共が東京に来て二十年このかた未だ曾て知らないうらゝかな空に温かい光を放つ朝日を迎へました。而して神代を思ひつゝ、雀の晴れくしい物語を軒に聞きつゝ、遺憾なく雑煮を祝ひました。

かくして目出度く二日を送り、又芽出たく三日を迎へました。自分の事から初めに書いて誠に失禮でしたが、貴君も必ず御

同様にめでたく舊い年を送つて新しい年を迎へられたでせう。御年寄様も、御壯んな方も、御子供衆も、みんな晴れやかな御顔で、阿蘇の御山の右手から豊榮のぼる朝日を拜まれたこととせう。いさぎ御芽出たか事と深く御喜び申し上げます。

此の新年に於ける私の心は、平凡ながら、

元日や晴れて雀の物語。

御民われ生けるしあり天地の

榮ゆる御代にあへらく思へば。

昔の人の此の二首に盡きてゐます。あなたに對しては陳言ながら、



山は阿蘇瀑布は須鹿流に人は君

わが熊本はこれにて足れり。

諒闇の中ながら有難き新年を迎へたる御よろこびを申し、あはせて、皆様の御多祥を祈ります。大正四年一月三日夜したむ。

\*肥後の鹿本郡地方では元旦に御ひわりと云つて上白米を四五十粒、白紙に包んでひれつたのを井の中へ投げ入れて、新玉の若水を汲み取ると云ふ。又元旦の爐には、年中使ふ鐵の火箸は棚の上に休ませて、その代りに栗の木の枝を削つて作つた火箸を用ゐるといふことである。

伊勢より歸りて友へ

旅といふものには是れなくはとかねぐ念じ居候金時計と煤煙との間を通して、遠き伊勢路にまゐり、畏き兩宮の參拜を遂げ朝熊岳のおだやかなる絶景を賞し、二見より鳥羽までの沿海の奇勝をもあらしめぐりし、又も煤煙と金時計との間を縫て、昨日正午事なう歸宅致し候。久振りの玄米御飯に腹をこしらへゆつくり晝休みして、夕方例の裸はだしにて庭に出て、内宮の御後ろなる神杉の根方より戴きまゐりたる苔と倭姫命にめでられ聖徳太子、聖武天皇、弘法大師等の靈跡に神さびし朝熊岳



奥の院の苔とを黒木石の皺々に點じ候、いづどや友人が平等院の蔦苔を石燈籠にからまして玩賞するを見て一種の興を催し候ひしが、我が小さき庭も是れにて神路苔、朝熊苔、鞍間苔の三珍苔にさびを添へ申し候、その中に御來遊下さるべし。つきぬ思出はその折に譲り申すべく候也。

身すがらの裸になりて庭の石に

苔の衣をさせにけるかな。

信濃路に旅せる友に

高原の澄みたる空氣を透ほして四方の高山を見遙かすが第一

の御樂しみなる御旅に、毎日の曇り、小雨、小風、小は小ながら御遺憾さこそと御察し致し候。御無理なく御旅あるべし。富士川の舟下りは御見合せ然るべきか。命がけの冒險はもつと意味深き方面にいくらもあるべく候。御自愛を祈る御自愛を祈る。

雨ふりぬ空はくもりぬ旅路なる

君無事なれと祈る今日かな。

低氣壓信濃路さけよいつくしき

人そこにあり山をめぐりて。

女郎花丈高き野を見わたして

川中島の昔しのべる。



## よるこび

## 習志野の友に甘藷の御禮

昨夜はお前觸れのお葉書拜受、今日は御本尊の薩摩芋一俵着、御厚情有難く頂戴致しました。まづ大儀一俵を臺所の土間に横たへた所剛敵無類、おかげで宅の臺處も百姓式の品位を備へて來ました。厚く御禮申上げます。

さんだ藁を除つて見ると、牛の角のやうな逞ましい奴が一ぱいにつまつてゐます。私は之れを見て直ぐに日蓮上人が、信徒

へ送つた禮狀に「牛蒡は大牛の角の如し、大根は大佛堂の釘の如し」と云はれた愉快な譬喩を思ひ出しました。

早速茹て、頂きましたが、今年の味はまた格別で、川越の本場に優るとも少しも劣りません。

子供等の仲間に入つて十分に鼓腹いたし、それから例のお八つ後の撃壤に出ようとする合間に此の御禮狀を認めました。

御賜物幾重にも有難う存じます。其の中の御上りを御待ち申して居ります。匆々。

## 守口大根糟漬の御禮



守口一樽難有頂戴いたし候。

「守口」の名は言を慎めと教ふるが如し。色の白きは心潔かれといふに似たり。根の細く長きは寡欲にして天壽を完うせよとのこゝろか、もしくは感識の根を深く長くせよとの意を暗示するものか。

サク／＼、カリ／＼と齒切れよき中に奥深く沁み行く幽なる味はひは例の如し。いふ迄もなく候。

舌を喜ばし心を養ふ御賜もの、有難う候／＼。不盡。

白く細く長きしまの守口の

大根ゆかじみ朝な夕な食ふ。

### 青豆粉の御禮

例年の通り國の香りゆたかなる「きな粉」御贈り下され有難く戴き申し候。

青くして黄な粉といふ、をかし。土に生ふる大豆の子にして富貴の標章たる黄金の片名を負へるもをかし。粉糠の羞恥みたる如き顔色しつゝ、其の旨き味はひの意表に出づるもをかし。げに汝は奇な粉なり。

聞く谷文晁米澤の青豆の黄な粉を愛して、之れをもたらず者には、報いを求めずして書を與へたりと。青色の黄粉、黄金の



役まはりをなせる、更にをかし。

家族五人皆餅黨にして同時に吹雪取餅黨に候。米澤の方言あべ川餅、即ち黄粉餅をふぎどり是れよりしばく恩澤に浴して床しく國香を聞き申すべく候。

御禮まで、草々。

### 白味醂「雪山」の御禮

白味醂「雪山」三瓶有難う拜受致し候。お釋迦様に縁ある山の名を負ひたる甘き酒、味はひもさこそと存じ候。

やがてお正月になり候は、家内子供等の下戸黨は、此の雪

山によりて小生が「澤の鶴」の向うをはるべく候。鹽醬油に加勢しては巢鴨産の土くさき芋大根も指を動かし頬を落すやうな味を添へ來るべく候。

御たまもの幾重にも有難う存じ候。奥様によろしく願上候。

### 高麗雉子一番の御禮

今朝九時御葉書着、ついで午後の二時頃御手柄の美はしき高麗雉子雌雄眼を閉ぢ翼を收めておとなしく安着、關稅の手數もなく待ち構へたる私共の手に落ち候。開封まづ羽毛の美に打たれ候。それから家内中の手より手に争はれ、剝製にしたらば



など惜まれながら、遂に長き尾がまづ抜かれて子供が机上の筆立に飾られ、これから毛むさにかゝる所に候。やがて山妻の庖刀に料理られて吾等が舌のお正月と相成候べし。牙えたる獵の御腕が媒して遠き新領土のケン／＼ホロ、が巢鴨場末の百姓の食膳に上る。不思議なるは運命に候。食指の動きたる趣は拜味の上委しく申上候べし。有難う候／＼。以上。

雞林の雉子海を越え山を越え

巢鴨の里に入れる春かも。

### 丹波栗及び干柿の禮

先刻は遠路わざ／＼御越し下されたところ、何の御愛想もなく甚だ失禮致しました。其の節は御國産の珍らしい果物澤山に御恵み下され、誠に有難う存じます。夕飯がすむと家内一同卓を圍んで早速拜味致しました。栗といひ柿といひ、何といふ美味でせう。干柿は暮れ以來四五ヶ國の名産を味はひましたか、まだこのやうな貴い味に接したことがありません。干したものがながら生な熟柿の柔かみと味とを失はずして、噛むといふよりは啜りたいやうな趣を具へたところ、千金と戴きました。殊に栗は皮が薄く、實の充實して居る具合といひ、梨のやうにサク／＼して、淡い上品な味を具へて居るところといひ、實に未



だ曾て見ざる所、味はへざる所であります。呑むのが惜しさに  
 噛みしめ、かみしめつゝ、「かう云ふのは口で食べないで頭で味  
 はへねばならぬ。私は此の年までまだこんなうまい栗を食つた  
 ことがない。」と私が云ふと、子供等がお父様が四十以上になつ  
 て始めて召し食がるのを私達が十歳そこらで食へては勿體ない  
 やうです。ね。」など云ひます。生てさへこんなうまいもの、う  
 てたり養たりしたならば又幾倍のうまさであらう、など云ひな  
 がら、柿二個、栗三個づつめてたく戴いて、あとは柿の箱に敷  
 いてあつた藁の管で俄作りの仙液七星湯（普茶料理て用ゐる砂  
 糖湯）を吸ひ込んで、初春早々七十五日生き延びました。そし

て書齋に引込んでから、此の喜びをどういうて現はさうかなど  
 考へながら、筆を噛み首をひねりつゝ、此の御禮状をしたゝめま  
 した。

家内一同に代はつて厚く栗も、柿も、の御禮を申し上げます。  
 御暇の折、また遊びに入らして下さい。左様なら。

### 鎌の御禮

昨今のお暑さにも御弱りなく御勉強の御様子、御芽出たう存  
 じ候。此の度は半農用にとて御國産の名鎌二挺御恵み下され、  
 有難く戴き申候。一双の利鎌片手に藁を刈り、片手に煩惱の根



を刈るべしなど云へば、禪坊主の謔言のやうに候へども、近ごろ面白き器を賜はりて、こんな事もつい思ひ浮かびて候。人に物を戴きたる事は数々候へ共、かやうに新鮮味と、奇抜味と、超越味とに富める贈物に接したる事は未だ無之候。川鴉の嘴のやうなる形も俗離れして殊に面白く候。其中御枉駕待入申候。御禮まで、匆々。

### 白豆黒豆の御禮

神路山五十鈴川の尊き神地より朝熊、二見、鳥羽まで、勢志の名勝を飛びくりに拾ひ讀みして昨十一日正午歸宅致候ところ、

御送りの小包着し居り、早速開封、御筆先の御近業の五冊に添へて御鍛先の御近業なる新らしき黒豆、白豆の大二袋御恵み下され有難拜受致し候。身を黒くし、心を白くしてまめくしく働けとの御心か。近頃面白き賜物をいたゞきて候ものかな。是より火を加へ水を加へいろくにして御心を拜味致すべく候。今月今日は昨年御一緒に阿蘇に登りたる記念日に相當り、出發早々二三度の草鞋の穿き直しから、垂玉、地獄、夜峯、トベンガ岳、千里が濱、案内者加藤堅松の肥満して落ちさうなる尻たぶ、是等を中心にして、思出は實に雲の如くに候。そして其の一々に貴兄の面影が伴ひ候。



年を経てまた越ゆべしと思ひさや

命なりけり小夜の中山。

阿曾は二たびも三たびも登りたき山に候。まして貴兄と共に  
 することを得ばいかばかり面白からん。曾遊の山川への二度の  
 音づれを考ふる丈にても命は食られ候也。

御禮が飛んだ所へ横ぞれ致し候が、是れも御國に愛着の爲め  
 と御ゆるし下されたく候。

四組の御夫婦の御方々、其の他の方々の御身に幸多かれと  
 祈上げ候。不盡。

もとの女中せん女に (主婦より)

御さはりもなく御睦まじう御暮らしの御様子、嬉しう喜んで  
 居ります。今朝二階の書齋で、めづらしくもないあり合はせの  
 せんべいて朝茶を喫みながら、お前によく笑はれくした庭の  
 計書などをゆつくりと話し込んで、さてお正午に近いから下り  
 ようなど云つて居る處へ、御心づくしの小包が著きました。に  
 こくくして開けて見ると美味さうな干柿ではありませんか。た  
 まらなくなつてまた急須を取り出して、つゞけざまに二度目の  
 御茶事を始めました。そして美味しいくを相の手にお前の事



をさまま〜と床しんで話しました。お前の旦那様は大層やさしいお方のやうだなど言つて、お前の幸福を喜びもしました。もう少し近い處であつたなら二人揃つて遊びにでも来て呉れるだらうになどと叶はぬ事まで、話し合つて、お正午の午砲も聞きつけずに長い〜お茶を戴きました。やさしいお二人の心をよく味はひました。厚く御禮を申します。どうかお揃ひ身體を大事にして目出たいお正月をお迎へなさい。

御禮まで、さやうなら。

### 肥後の友に玄米の御禮

いつぞやは日本一の「菊池米」を澤山御恵み下され、誠に有難う御座いました。其の節すぐに簡単な御禮を申上げましたが、又改めて追加の御禮を申上げねばならぬことが出来たので、つまらぬ繰言を並べることにはいたします。

其の次第は、御恵みの玄米が残り少なくなつた時に、あんまり惜しいので、後の樂しみにと云つて、少々取つておきました。が、程へて或日の晚餐の折の事、私が炊き立ての御飯に箸をつける、すぐに

「今夜の御飯は、何だか馬鹿に美味いぢやないか。」

と申しますと、子供等が手を叩いて「解つた〜」「中てられた」



と申します。「何だ？」と聞くと、今夜は特別に、残しておいた肥後米を炊いて見たので、「お父様がお解りになるかどうか試してみよう。」といふ事であつたさうで、それがポツリと中てられたので、頑固な連中が喝采したといふことでありました。

それから私は本場の肥後米が戀しくなつたので、戴いたのの残りを近所の米屋に見せると、皆驚いて「背が張つて、脂が乗つて、光りがあつて、素張らしい米ですが、私共はまだ生れてこんなお米を見たがありません。」と云つて、恐入つて居ります。仕方なく其のまゝにして居ります中、「澤の鶴」の石崎で米を扱ふことになつて、大分手廣くやると云ひますので、用聞き

の番頭に、又例の戴いた残りを見せると、是れも驚いて居りましたが、「とにかく歸つて、主人に見せますから、御貸し下さい。」と云つて、持つて行きました。そして又來ての報告が、かうです。

「歸つて主人に見せましたら、主人もかういふお米は見たことがないと申しまして、東京中にこんなよいお米を召食つていらつしやる御家は、外に一軒もありますまいと申します。」

といふことでした。之れを聞いた私共の驚きと喜びとを察して下さい、そして貴君といふ友達を持つた私共の誇りを察して下



さい。こんな事を申すと、「又下さい」といふ體の好い御ねだりのやうにも聞えますが、決してさうではありません。唯だ黙止すにもだされず、有つた通りを御報告して御禮にかへるだけてあります。

誠に有難う御座いました。皆様によろしく、匆々。

### 熱海なる老師に

昨日は快晴の日曜にて、丁度正午少し過ぎの春日を浴びつゝ、二階の書齋に茶を啜り居り候處へ御溫情の繪はがさ着、それより南海の勝地に於ける御住居の御模様など想像して閑談をほし

いまゝに致居候うちに、御惠みの御魚無恙到着、すぐ様書齋に新聞をしきて小包をひろげ、夕食には早速調理して薄鹽のしまつた美味に舌鼓いたし申候。今日もまた引つゝいておいしく頂戴致居候。御厚意誠に難有く深く御禮申上候。

御示しによれば、この頃また先年の御不快にて御惱ませの由、しかし早速御快癒にて何よりに奉存候。どうぞ春暖につけても折角御自愛遊ばされ度祈願此の事に御座候。

久しく御目に懸からず毎日溫容を想望致居候。御目に懸れば短才不辯心ゆくやうには御話しもつゞけられず、又貴重なる御時間をつぶすことを恐れて、いつも残り惜しく御暇は致し候へど



も、拙つたな心こころは常つねに老師らうしの御身おんみに懸かかり居をり申まをし候こ。何卒なにとぞ神しんを滅へらす御勉強ごべんきやうの方は六七分むななぶちがたに止とどめさせられて、閑遊かんいう養神やうしんの暢のん氣きなる御工夫ごくふう遊あそばされたく、愚おろかなる百姓しやうぢ好きずきさは百姓しやうぢ相應おうにこ  
んな事ことのみひそかに願ねがひ居をり候こ。

御禮おれいに添そへて愚おろかなる縁言くりにごと申まを上あ候こ。乍末まづびつ筆奥なから様おくさまによろしく御  
傳つたへ下くだされ度願たくはひ上あ候こ。荆妻けいさいよりもよろしく申出まを候こ。  
幾重いくへにも御自愛ごじあい祈いのり上あげ候こ。拜具はいぐ。

寫眞撮影の御禮

此間このあひだはわざ／＼御入來ごじやうらい、結構けつこうなる御みや戴いたさ、有難ありがたく御禮申おんれいまを

上候あひ。例れいながら御粗末ごそまつ、失禮致しつれいいたし候こ。

御執勞ごしつらうの御寫眞ごしやしん（寫眞しやしんといふべきか、御寫眞おしやしんといふべきか、  
「御おん」の字じの加除かぢよに迷まよひ候こ）早速さつそく御送ごんぐり下くだされ難有ありがたいたゞき申まを  
候こ。御手際ごてぎはによりて山猿やまざる夫婦ふうふも一方ひとかたの紳士しんし淑女しゆくぢよと相成あひなり感佩かんぱい此  
事ことに候こ。似たの似にないのと云いつて手てより手てに移うつしあひたる光景くわうけい  
御察ごさつし下くだされたく候こ。早く大儉約だいけんやくを行おこなひて器械きかいを買かはねばなら  
ぬと長太息ちやうだいそくいたし候こ。御禮おんれいまで、匆々さうさう。

信州の姪に年始状 (主婦より)

お揃そろひ御機ごきげんよう新あたらしい年としを御迎ごむかへなされた御喜ごよろこびを申まをし



上げます。いつぞやは細々の御たよりを戴きましたのに、御返事も上げず、失禮致しました。お芽出たいやうな御便りでありましたが、ほんとに此の上のめてたさはありません。どうか身體を大事にして、可愛い赤ちゃんを御生みなさい。

その後毎日日記をつけてお出でなさうですが、御心掛うれしう存じます。どうかいつまでも御ついでなさいまし。いつか信州に旅行でもしました時、その蜜のやうに甘さうな日記を見せて貰ふのが何よりの御馳走らしう思はれます。赤ちゃんが生まれても、どうか古い女にならずに、新らしきにお進みなさい。私共の日記は去年公にした半農生活といふ小さい本に五

六日分載せました。いつか見て載させせう。△△叔父さんも遂におかくなりました、お驚きなれたこととせう。早い遅いの別こそあれ、御互にいつかは斯く成り果てるのです。せめて此の世にある中は、清い楽しい生活を送つて、静かに「おさらば」を告げたいと思ひます。御互に丈夫に幸福に長生を致しませう。おむつまじき只今の御生活まことにうれしう存じます。長へに幸多かれと祈り上げます。さらば。

同じ人に御産の祝 (主婦より)

お母さんも、お祖母さんも、△△の伯母さんも、月島の叔父



さんも、みんな揃つて女であつたから、松子もきつとお姫さまに相違ないなどと噂して居たところへ、御主人様からの御通知で、男の御子が生まれたと承り、大てかしくと喜びました。其の後お前も赤さんも揃つてお變はりがない由、何といふ御目出たいこととせう。どうか御無理なく御養生なさいまし。何か御祝を差上げたけれど、宅には姪甥が數多居て終始掛合にお産があり、一々物質の御祝ひが出来かねるところから、東京以外には不本意ながら致さぬことにして居ります。御めたい初産でありますから何か紀念に差上げたいは山々ですけれど、右の次第悪しからず思つて下さい。どうか身體を大事にして赤さん

んをよく御育てなさい。御喜びまで。かして。

### 高工を卒業した甥に

優等にて御卒業、殊に卒業生を代表して感謝の式辭まで讀まれた由、結構々々、お父さんお母さんもさぞ御喜びの事と御察し申します。一休み休んだらば、今度は兜の緒をしめ草鞋をはきかへて更に社會といふ浪風の荒い大きな學校に入らねばなりません。緩々としかも倦まずに、人を容れて而も己れを失はずに、人に欺かれても人をば欺かず、どこまでも清く、高く、大きく、自分を磨き上げて行かねばなりません。而して又



更に優等にて人生の學校を御暇するやうにせねばなりません。今度お前の入る「世の中」といふ大きな學校は、私の現に入つて居るのと同じ學校です、吾々はこれから同じクラスメイトとして仲よく公平に競争せねばなりませんよ。御互にしつかりやりませう。

御よろこびに御はなむけをかねて、思ふまゝの粗末な詞を呈します。御機嫌よう、左様なら。

### 農科大學を卒業せる義弟に

御吉報繰返し拜讀、驚喜して四人分の雀躍を致し候。大學の

卒業さへあるに、優等さへあるに、首席なり、恩賜の時計也、教授候補者の推薦也、此の四重五重の喜び、しかも四人を代表しての喜びをいかにして表はすべき。あはれ艱難は御身を玉にせり。もし亡き三人の方々の御身が光ある今日を見給は、いかばかり喜び給ふらんと、そゝろに涙せられ候。もう第一歩の大成功は御身をして重さを負うて遠き旅につかしま候。急ぐべからず。必ず身體を大事にしてゆるくと高き理想に進むるべし。

何かな紀念品をなど思ふ中に、御喜びが御わびを要するまでに延引致し候。ホンの心祝ひばかりに、是れからの御旅行用に



思ひ、倉末なる磁石を求め候が、只今札幌御在宿に候や、もし御在宿ならば直ぐに小包に託すべく、御旅行中か御歸省中ならば、そこへ上げるか、或は御歸札後にのばし候べし。折返し御返事下され度候。

御喜びをかね御問合せまで、匆々。

### 近親の若者の結婚を祝ひて

御吉報の御手紙うれしく拜見致しました。御良縁誠に、御芽出たう存じます。どうか末長く偕老の契りを重ねられるやうに祈ります。今度御興入れの新らしい御方には、是れから何彼

につけ御厚情を蒙ることでありませう。何分よろしく御願ひ申します。御兩所の萬福を祈り上げます。

輕微恥入りますけれども、御祝ひのしるしとして、粗末なる品物一反御目に懸けます。新らしい御方の御手に縫はれて、新生活に入つたお前が喜びの身に纏はれることが出来れば有難い仕合です。

折角嬉しい忙がしさの營みに御骨折りなさい。御祝儀の晩には、時刻を計つて、百里の都で、拙き「四海波」を謠ひませう。可祝々々。



## 姪の夫なる人に

御懇ろなる御手紙を拜見して近來の悦びを感じました、而して天が△△家と私共一類とに福してくれたことを深く感謝致しました。

どうぞ睦まじく末長く御暮らし下さい。御兩所の御多祥を祈り上げます。

御縁のはしに連つた私共こそ、實に光榮の至りです。どうぞ御見捨なく長く御交際下さるやうに願ひます。

御住居は善美を盡くしたところの由、淺間の麓の新緑の間の

塵もとめぬ高樓に蜜月を送らるゝ新らしき御生活を遙かに想望して居ります。折を得て是非御邪魔致し、都の塵に汚れた心をすゝがして戴きたいと思ひますが、あなた方も御上京の折は必ず御訪ね下さるやうに願ひます。

簡單に御挨拶まで。折角御自愛なさるやうに祈り上げます。

御機嫌よう。



## さまざま

## 驅逐艦「白雪」なる甥に

命がけの戦争に参加して居る忙がしいお前からは度々長い手紙を貰つてあるのに、こちらには書ける手の持主が三人居りながら、一度の返事も出さず、我れながら心外の至りてあります。阿蘇の來訪の空だのめは今度の旅の中で最も悲しいものであります。「肥前」(軍艦)からの快活な便りは、しきりに來訪の日の近いことを報じて来る。八月の十日頃は阿蘇の山中でお前と

手を握り合ふことが出来るであらう。吾等は可愛ゆき甥と、△は懐かしい兄さんと、黒山の椎の木蔭に、白川の涼しい風を浴びつゝ、叔母が手製のワッフルでもしやぶりながら、盡きぬ物語を繰ることが出来るであらう。

「兄さんが何時来るてせう。」

「もう四五日だよ。」

「もう三四日だよ。」

「うれしいな。一、二、三、四、もう四つ寝ると来るんですね。」

など云うて居るところへ、驅逐艦「松風」からの便りが来た。



披いた結果は無論がツかりである。「此の雲行ては、とてもダメだ。しつかり御奉公するがよい。」「兄さんは軍に行くんだから、今度は逢はれませんか。」などいふこととて、掌中の球を取られたやうにボカンとする。それから十四日には、阿蘇に登つて、世界一の噴火口の言語に絶した光景に打たれる。十八日には栃木温泉を立ち、其の夜は田原坂から二里ばかり奥の大井といふ村の初見の友の家に泊つて、生まれて覺えのない誠のこもつたもてなしを受ける。次ぎは嚴島に泊つて太閤の建てたといふ千疊閣に、瀬戸内海の涼風をあびて一晝寝する。それから京都に六泊して金閣銀閣をはじめ宇治奈良に古を偲ぶ。無事に巢鴨に歸

つたのは二十七日の午前十一時。三十幾日ぶりて香ばしい玄米を食べながら、禮狀を書く、留守中のたまつた仕事を形つける。後ればせに菜大根を蒔く。久しく主人を離れた草木をいたはる。そんな事で何となく心忙しく、お前にも手紙を出さねばならぬ、今日は書かう、明日は書かう、成るべくは委しい、書きばえ讀みどたへのあるのを、など思つて果たさぬ中に、今度は驅逐艦「白雪」からの氣味のよい手紙を貰つたといふわけだ。

どうか、しつかりやつて呉れ。私は土を掘り本を讀む丈で、政治や軍の事はさつぱり知らぬ。唯だ毎日お前の武運のめてたからん事を祈つて居るのみである。



やかましい叔父の家の炬燵で、床も取らず蒲團もかけず、小便もせず十七時間寝ついて見せたアノ度胸を大處に用ゐるのは是れからだ。どうか獨逸の毛唐人の前で、あの悠然たる落つきを見せて、しつかりやつて呉れ。

是れまでは御無沙汰してすまなかつたが、これからは葉書でなりとも、三人手まめに百姓相應の應援をするつもりだ。

しつかりやれ、しつかり、武人らしく、上杉謙信公の流れを汲み、巢鴨の潔白な飯を食つた武人らしく。

うちでは皆無事。△△も壯健、朝鮮も御無事らしい。御安神々々々。(九月十四日)

### 札幌の友に

風の聲、月の色、蟲の音、都はもう秋になりました。北の御國は一段の涼しさであります。御機嫌よく御過ごしてすか、御伺ひ申上げます。

先頃は不在中わざ／＼御訪ね下さつて、珍らしい御土産を戴き、誠に有難う御座いました。折悪しく旅行中で御目にかゝれず、歸京匆匆の遺憾此の事でありませう。かやうな事があれば、前以て御知らせするのでありましたが、實は此の夏熊本の人に招かれ、序に妻子を引きつれてまゐることにしたのであります。



七月廿六日に東京を出立して一先づ阿蘇山中の栃の木といふ温泉に落ちつき、八月二日からは私一人日奈久といふ有名な海岸の温泉地に出かけて十日まで滞在、それから再び阿蘇の人となつて三四日前やうやく歸村した所であります。

九州では河野君が奥さんと同道で隣りなる大分の別府温泉へまゐられ、八月十一日に栃の木をおとづれるといふ豫約までありましたが、俄に障ることが出来たといふことで、つひに逢ふことが出来ませんでした。歸つて見ると三百里の北からわざわざ御出かけのあなたに御目に悪かれず、面白かつた一夏の中の遺憾この事てあります。

今度御上京になる時は是非前以て知らして下さい。御同窓の方をも招いて、小さき甲鳥園に小集を催さうと思ひます。

御禮をかね悔しさの御披露まで、匆々。(九月四日)

### 阿蘇山中栃木温泉より軍艦

なる甥に (主婦より)

手製のワッフル十個と羊羹少々、只今小包で御送りしました。如何に奥山でも、ジャム材料の果物位は何かあることと思つて安心してまゐりました處が、どうでせう、夏みかんだけて何も無いではありませんか。やむなくパンに付けようと思つて、來



る時拵へて持つて来た杏のジャムを用ゐてつくりました。こんな譯ですから、不味くつてとてもだめですけれど、送る／＼と  
 いうて何時までも送らぬてはどうも寝ざめが悪いから、恥を忍  
 んで御送りするのです。箱に空が出来ましたから、米澤ののし  
 梅を四五枚穴ふさぎにつめました、御笑味下さい。御仲間と笑  
 つて食べて下さい。包む紙もなく縛る紐もないので、子供の古  
 帯を裂いてしばつたところが、プツンと一意張りて切れました  
 から、今度は縋帯でしばりました。いくら新らしい縋帯でも、  
 かういふ物にまかれては叶ひません。どうぞして逢ひたいもの  
 ですわ。

さやうならば、御大事に。

### 鎌倉なる松聲濤聲莊の友へ

御懇書難有繰返して拜見致しました。御不快で御やすみの御  
 容子、不時候の折柄折角御養生なさるやうに祈ります。

御名前が私の記憶から消え去つて居るだらうとの御疑ひ、御  
 尤もながら、事實大變な相違です。私はあなたの御名前が本科  
 の出席簿に見えなくなつてから幾度か其の理由を幹部の人に尋  
 ねました。又運動部に關係のある人達や、坪内先生や内ヶ崎氏  
 などからも、耳を敬て、あなたの消息を聞きました。あなたが



家庭で劇を御催しになるといふ事が新聞に出た時には、あなたの復活を見るやうな特別の興味を以て讀みました。是れは不束な御相手をした豫科一年半の経験によつて、あなたの將來に特別の期待をしてゐたからです。しかしあなたが本科を卒業して新しい文學者の一人に御なりなされると、今のやうに父祖の業を守つて濫かい落ちついた生活を御送りなされると、いづれが私に取つて嬉しいかと云へば、私は躊躇せず、あなたの今の御境遇を祝福します。

あなたには意外でありませうが、私は昨年（去年）の十月末に、すべての事あなたを材木座の松聲濤聲莊に御たづねする所でした、御

たづねする積りて朝早く新らしいカラなどをつけて家を出かけたのでした。それは早稲田の三十年祭の文科の紀念展覽會について、特別にあなたの御助力を仰ぎたい爲めであつたのです。かう云へば直ぐ御察しにもなりませう、誠に物質的な御恥かし御願ひで、私はその役目を仰付かつた時に、あなたを知つてから厭だと云つてだゝをこねましたところが、坪内先生はじめ委員の人達が、知つて居ればこそ是非願ひたいのだといふ事で、無理おしに仰せ付かつて、已にその爲めに家を出かけたのです。それが幸ひ俄に御願ひせずともよささうになつたので、途中で鎌倉行を見合はせることになつたのであります。今に



なつて見ると、それが却つて残念のやうにも思はれます。

三十年祭の當日にも、私は遙かにあなたのシルク、ハットの立派な姿を見て、あゝ△△君だなど思ひました。アーチャー氏の講演の時などは、無論一目見て豫科時代を回想してゐたのです。

私の『半農生活そのまゝ』を、御家族御一同特別の興味を以て御讀み下されたよし、身に沁みてうれしく存じます。

今度あの拙い作に鋏を取る間の書き捨て草數篇を加へ、一まとめにして公にすることになりました。御厚情に對する御禮のしるしに一冊御目に懸けます、御本棚の片隅に並べて御愛藏下

されば有難く存じます。

私は曾て夏の三十幾日を葉山に送つたことがありました。鎌倉には三度遊んだことがあります。其の中いつかよい機會を得て松聲濤聲莊に御邪魔致し、あなたが坪内先生と共に聞かれた松風に耳を洗ひたいと思つて居ります。

序に私の庭の寫眞三枚御目に懸けます。五月の半ばから稽古をはじめた俄寫眞師の拙荆が手ずさみてあります。

折角御自愛なすつて一日も早く御快癒なさるやうに祈ります。

奥様、御妹御さまにもよろしく御傳へを願ひます。御機嫌よ



う、左様なら。

元の女中とよ女に (主婦より)

御手紙が今着きました。この間あげた葉書が無事に着いたさうで、安心しました。お前は毎日宅の事を思ひだすと云うてくれるが、こちらでもお前の事を話さぬ日がありません。この間も申した通り、お前が歸ると間もなく私が病氣になつたので大困りました。一時は両手を動かすことが出来なかつたので、子供が味噌を摺つたり米を磨いだりしてくれました。僅か八つの子供の子ぢやありませんか。私が傍に居てそれを見て居たつら

さを察して下さい。早速あちらこちらに頼んで女中をさがして貰つたけれど、何しろ年の暮れだからどうしても見つからず、到頭そのまゝ淋しい新年を迎へました。それから相變はらずさがして居る中、只今やうやく一人見つかったのでそれを雇はうかなど話して居る處へ、お前の手紙が着いたので。よくはつきりと讀めました。御手紙によると、只今養家に居らぬやうだが、どうしても歸らぬ事に極つたのか、元の通り歸る事になつたのか、そこがはつきりとわかりません。もしどうしても歸らぬ事にしまつたら、どうだらう、半年位でもいゝが一つ手傳つてはくれまいか。勿論逃げて來るやうではいけません。何處



へも憚らずに來られるやうな都合だつたらの話だよ。萬一養家を繼ぐやうな事になつたら、よく其家を御守りなさい。何時かお前にも話した通り、大工が今月の半頃から來る事に極つたので随分忙がしいだらうと思ひます。こんな時にお前に手傳つて貰ふ事が出來たら、どんなに嬉しいてせう。お前から返事が來るまでこちらの方をきめずに待つて居るから、この手紙着き次第、急いで様子を書いて返事をしておくれ。私はどうしてもお前に手傳つて貰ひたくてしやうがないのです。

お前に何か送つてあげたいと思つて居るけれど、病氣で何處へも出られぬものだから、まだ御無沙汰をして居ります。

子供は變はりなして毎日風あげやかかるたなどして元氣に遊んで居ります。友達がなくて淋しい時は、何時もお前の事を思ひ出して懐かしがつて居ります。云ひたい事は澤山あるけれど、今日はこれだけにしませう。是れからしばらくの間随分お寒い事てせうが、どうか身體を大事にして丈夫でおいでなさい。返事を待つて居るよ、さよなら。

### 學生相撲への出場について同郷の

#### 中學生に (保證人として)

ようこそ御尋ね下さつた。丁度幹事の増子氏からも同様の問



合せがあつた所で、あなたから御尋ねの趣といひ、幹事の問合せといひ、誠に行届いた事と感服して居ります。實をいふと私は學生たる者、殊に中學生たる者が國技館のやうなさかり場て左藝の見せ物を演ずるといふ事を好みません。無論相撲は歴史的由緒のある藝道で、又立派な體育でありませう、又其の中に武士道的要素を含んで居るから、それを奨励するのが青年の志氣を鼓舞する所以だとも云はれませう。私も幼い時分から相撲が好きて學校や同郷人の運動會などでも、随分と取りました。又力士の相撲も随分見ました。私は相撲道に對しては同情こそあれ、反感は少しも持つて居りません。唯だ私は世の弄びとなる

藝人が裸藝を演ずる寄席のやうな所で、天下の學生が應援の彌次馬連に擁せられて賭勝負のやうな小旦那藝をするのが面白くないといふまでです。あゝいふ催しにはよく有難からぬ五月蠅い餘波の付き纏ふもので、物言ひをつけたり、術策を弄するところが兎角有り勝ちなるもの、又一度その選手などになると、つい左藝の代表者に祭り込まれて足のぬけぬやうになるものです。あなたが若し彌次式の人間か或は平々凡々の學生ならば、私は何も好んでこんな事をいひません。私がかくいふのはあなたの立派な性格と學業とを玉成させたいと思ふからです。

但し物は見方一つて理窟はどうにも立ちます。野見宿禰やオ



リンピック、ゲームの故事などを引いて、斯様な催しを辯護する  
のも六かしい事ではありますまい。私のかくいふのは唯だ私の  
趣味好悪で、それを齒に衣させずあなたに云ふまでです。

もし是れが自分の子の場合で有つたならば、私は直ちに之れ  
を差止めます。けれどもあなたにはさうしたくありません。あ  
なたは立派に分別力のある人であり、又こんな小事の爲めに一  
生を誤る人でもない。已に天下の多数が認め、學校が希望はせ  
ぬが禁じもせぬといふものを、私が保証人として禁じたくはあ  
りません。私は學校が私の返事次第で許否を決するといつたや  
うに、あなたの好み次第でどちらにも賛成することにしませう。

あなたの嗜好と良心の示す所とに従つて、いづれにても御決し  
なさい。御返事まで、左様なら。

おとづるゝ約ありし友の來ざりしに

昨日と今日と家内待ちくらしして、つい待ちぼうけ、近頃面白  
からぬ日は此の二日でした。

待つ人はまでも見え折々に

空をながめてあゝ〜といふ。

君訪は、暑さわすれん君來ずて

いたづらに暑き二日なりけり。



菓子くわしはすゑ肉にくはくさりてボカンかな。  
事實じじつです、眞情しんじやうです。皮肉ひにくではありません。

去年訪ひし記念の日に (阿曾の友へ)

去年きよねんの今日こんにちを思おもへばたいく感涙かんでいの流ながるゝのみに候まをす。大黒様だいこくさまに祝福しゆくふくせられたる御家内ごけい皆々みなみな様の御面影ごめんかげ、川かはの中なかを進すすむる人車じんしゃ、白布はくふに清きよめられたる縁側えんがは、三度さんどの庭風呂にわふうろ、孟宗まうそうの竹筴たけやぶ、阿蘇あその遠望えんぼう、新屋しんやにての下手揮毫へたきぎゆう、ソギヤン、ハツテンの珍めづらしき御言葉ごことば、立ち際たちぎはの寫眞しゃしん、いろゝの幻影げんえいが走馬燈まはりどうろうの如ごとく頭あたまの中なかに去來きらいして夢心地ゆめごちに相成あひなり候まをす。皆々みなみな様去年きよねんの如ごとく、去年きよねんにもまして

御丈夫ごぢやうぶに候まをすや。私共わたくしどもは去年きよねんよりも丈夫ぢやうぶに候まをす。感謝かんしゃと喜びよろことは盡つくすべからず。言外げんぐわいに候まをす也、ゝゝ。

日ひ一日いちにち去年きよねんの夢路ゆめぢをたどりけり。

春雨庵主しんぬあんに

今夜こんやはいよく伊勢いせまゐりの門出かどでをなさんと、支度したくもそこそこに整ととのへて、神風かみかぜの吹ふく勝地しょうちの様さまなど思おもひ浮うかべ居をり候まをすところ、兩三日りやうにちらひ來きの低氣壓空ていきあつそらをとよもし、魔まの如ごとき雨風あめかぜ執念しつねんく往來わうらいしていつなごむべしとも見みえず候まをす。やむを得えず、しばらく出立しゅつたつを見合あはせて十日かす過ぎすに致いたし申まをすべく、御厄介ごやくかいを願ねがひ候品しほはそのま



ま歸京まで御預りおき下されたく候。

吹きぬ降りぬ晴れぬ曇りぬ立ちてまし

立たざらましの心いられや。

「落ちつかぬ昨日今日になんと、空のみ眺められ給ふる」とても、『源氏』ならば書きつけさうな所に候。御一笑下されたく候勿々。

横須賀なる甥へ

御手紙有難う。御壯健で御勤め、何よりに存じます。お前を迎へたい心はいつも胸一ぱいなれど、流行兒のお前をさう

く呼び立てゝは、さぞ迷惑であらう、汽車賃も上げず、ろくな御馳走もせず、入港の度毎うるさく「来い〜」と云つて、困つてしまはれてもと遠慮して、しばらく御無沙汰をしたのであつた。明日から二十日迄は學校の創立記念やらポート、レースやらの休みて、しばらく安泰である。行く處も多からうが、百忙中の一閑を割いて来て呉れたら、どんなに嬉しい事であらう。明後の日曜などいかに。

睡蓮はもう數日前から咲かなくなつた。芙蓉はもう三四輪の小さい名残の蕾を持つてゐるばかりである。日に〜赤くなる柿と、日に〜大きくなる菊とコスモスの蕾とが、秋の積極



的發展を淋しく見せて居るばかり。心なき庭の光景も何となく人待顔に見えるのが面白い。草々。

### 大阪なる友へ

阿蘇山頂よりの御端書うれしく拜見。九日に雨を冒して御登山ありし由、其の日には私共が丁度朝熊岳頂上の宿屋に降り込められ、風雨を冒して山路十二三丁奥の本堂奥の院に参詣したるも不思議の御縁に候ひしが、御端書が丁度私共が昨年阿曾の大噴火口に立ちたる八月の十二日に着きたるも更に不思議に候ひき。それにつけても去年を今年になして、君と登山を共にす

ることを得ば、いかに面白かりけんなど、そゞろに思ひ出でられ候。

人事意の如くならず。此の夏も遂に御目にかゝり得ざりしは返すくも残念に候。御二人御自愛のやう祈り上げ候。匆々。

### 高麗雉子の御馳走に招く

此間は有難う。南洋産の大貝に、神戸の美肉に、御影の銘酒、澤山の御みやげに、おかげで貧寒な百姓家も豊潤な光を放つて來ました。いつも聞く「苦しきは宮仕へ、捨つべきものは弓矢なりけり」の洒落てはないが、「うれしきは御みやげ、持つべきも



のは甥なりけり。物貰つて「有難い〜」と云つては、乞食のやうで見つともないが、物貰つて喜ぶのは人情で、乞食の根性は誰れにもあるであらうと思ふ。吾等には役人が爵位を貰ひ、學者が博士號を貰ふよりは、心清き人の眞情こめた贈物の方が何程有難いか、わからぬので、是れは此の美しい乞食根性をザツクバランに言ひ表はしたに過ぎません。

大昔は御禮を言ふ事を「よろこびを申す」と云つたものだが、私は此の、自分の腹に感じた心持を正直に言ひ表はした語の方が、「御禮」「謝禮」などいふ餘所行きさの儀式張つた、支那くさい見せ掛詞に比べて、何ぼう面白いか知れぬと思つてゐる。是れは

お前が眞情の贈物に對する私の「よろこび申し」だと思つてくれ。

今日朝鮮から、美しい高麗雉子雌雄一番到來した。獨立の小國が大國に併呑された運命を、小さい飛鳥の身に象徴したやうに、首を垂れ、翼を收めて勝者の片割れの口に入る痛々しさを見て心に涙しながら、遂に勝者の殘忍性を發揮して、お晝餐には雌の柔かな肉の半ばに舌鼓うちました。残りはまだ二三日はあつてあらう。都合がついたら今度は手ブラで来て、お父さんの御厚意を味はつていらつしやい。御禮をかね、御知らせまで。左様なら。



## 梅雨のころ挿花の先生へ (主婦より)

今年ことしは空梅雨からつゆとても申まをすのでせうか、一向雨かうあめが降ふらずに毎日まいにち風かぜばかり吹ふいて居ゐるので、雨あめよりもいやな氣きもち持もて御座ございます。  
 其その後ご御身ごみ體からだいかっていらつしやいますか。早速さつそく御見舞ごみま申上まをく  
 べき處ところを、先日せんじつ奥様おくさまから頂いたきました御住所ごぢゅうしょの御葉書ごはがきをしまひ無な  
 くしましたので、濟すまない〜と思おもひながら、つい御申譯ごまをしわりの無な  
 い御無沙汰ごぶさたを申上まをげました。只今ただいまやつと見みつけ出しまして、後おく  
 ればせの御見舞ごみまを申上まをげるので御座ございます。  
 お慰なぐさみに御菓子ごくわしでも差上さしあげたいと思おもつて居ゐりますが、さうい

ふ物は召食めしあがつてもお宜よろしいので御座ございます。また御歸京ごききやうに  
 御間ごまが御座ございます。御不快ごふくわいの處ところを誠まことに恐おそれ入りませけれど、  
 御差支ごさしつかへがございませでしたら、一寸御知ちよつとらせ下くださいまし。  
 自由じゆうに出でかけ得うる身體からだでありましたならば、御目ごめもじして御  
 見舞みま申上まをげたら御座ございますけれど、致方いたしかたが御座ございません。どう  
 ぞ御無理遊ごむりあそばさず御静養ごせいやうなさるやう祈いのり上げます。かしこ。

## 竹馬の友へ悔み狀

御父上様おんちやうへさま御かくれ遊あそばされ候由よし、御知ごちらせを戴いたさ、驚おどろき申まをし  
 候ねんじつ。年壽ねんじつに憾つらみなき老おいを見送みおくり、常つねに膝下しつかに侍じして仰事きやうじに心殘こころのこり



なき人にも、かゝる別かれは深く心を痛ましめ候ものなるに、  
 況んや二百里の山河を隔て給へる大兄の、此の大事に逢ひ給へ  
 る事、御心中深く御察し申上候。小生も御父上様には去る四十  
 年の正月歸郷の折に御目に懸かりしのみ、其の後はとかくかけ  
 違ひて、遂に御目見えする機会を失ひ居り候處、計らず御訃音  
 に接して、夢のやうな幼時の回想に耽りつゝ、昔の御面影の悲  
 しく懐かしく辿られ申し候。

輕微恥入候へども御香奠のしるしまてに小爲替一葉封入致  
 候。御靈前に御供へ被下度奉願候。

先づは取敢へず御悔みまで、乍末筆御母上様奥様其の他皆々

様によろしく御傳へ下されたく候。敬具。



## その日く

## 船なる甥に (主婦より)

お變りなしてすか。こちらには皆無事ですから御安心下さい。  
 晩秋の甲鳥園はもう見る影もありません。あのやうに美しく  
 一面にむした青い苔が、昨日今日の寒さに皆土を離れて、ペラ  
 ペラになりました。そして黄色い銀杏の葉や、赤い紅葉などと  
 同じやうに風に飛ばされて居るのです。  
 今日のお晝食は親子揃つて、御飯がはりに丸のむし芋を食べ

て見ました。親も子もみんなホクホク喜んで、ちりちりと熱いの  
 を吹き〜戴きました。御飯がはりに芋を食べたのは今日が始  
 めてです。萬一食べた後に胸が焼けて苦しいやうな事があつて  
 はと心配でしたから、かねて聞き及んで居りました茶と食鹽と  
 を多分に副食と致しました。その爲めかサツパリ胸もやけず、  
 至つて腹心地がよく、百姓趣味を一層深く味はひ得たやうな氣  
 持がして、非常に愉快に思ひました。

もう十五六日で逢はれるわけですね。この繪はがきは何處へ  
 行くのでせう。伊勢の海でせうか、神戸の港でせうか。御大事  
 に。さやうなら。



## 若き農友へ (其の一) 穴居

檜葉躑躅の葉の間に床しからぬ霞を棚引かす治部蜘蛛の網を拂ひては、小虫の姿を追ひまはし、摘みつぶし居り候處へ近處の老農友來訪、四阿に請じて、しばし閑談に世を忘れ候。老友穴居の効能を説くこと頻りなり。洞穴の中は冬暖かく夏涼しくして大地母體の溫熱を直接に身に受くるの益あり、光を豊かにし、空氣の流通をよくする工夫だに施さば、一舉にして太古と最新の二生活を併せて享樂するを得べし。われ屋後に小さき土室を作りたるに、牧夫等勤めざるに行きて起臥す、而して更に

其の健康を害することなしと。老友は牧牛擊壤の業に遊んで、乳蜜の豊かなるに飽ける人なり。事毎に一見識を蓄へて眼中王侯なし。往々古を是として今を非とするの癖あり、又一方穴居を説きながら、雪隠は二階立にして、狭くとも四疊半大にし、中に幅を掛け、香を焼かんと欲すなどいふ愛らしき矛盾説を唱ふることあり。然れども新らしきを追ひ、妥協を事とする今の世に此くの如き人を見るは爽快の事に候。又小生が此くの如き人と忘年の交りを結ぶことを得たるは有難き仕合に候。

老友はまた、アメリカより近着の雑誌に載せたる所によるに、速成健康術や頓悟術にて鍛へたる人の身體をX光線に照らせ



ば、其の骨髄にいろ／＼の無理の生じ居るを發見する由、俄細工のものに健全圓滿なるはなし、静坐などいふも如何なるものにやなど話され候。

小生は曾て歐洲の或學者が、人類は二本足て歩くやうになりて身體に無理が出来たり、吾々は四足獸の昔に歸らざるべからずとて、四つ這を奨勵する動物還元論を説きたるを見て深き興味を感じ候ひき。乞食のやうに、何事にも何物にも趣味を有する小生は、此の老農友の話にもコロリと釣り込まれ申し候。同味の友に、同味を頰かたんとて、かくは晚餐後の半時間を費し候也。

「静坐して肥ゆるをいそぐ世の中に、今日も土ほる明日も土ほる。」御一笑ととと。

### 其の二 新緑

玉萩の箒を驅つて風なき庭の面に、一面の小波を描きて後、しばし小庭の新緑に見とれ候。新緑のいろ／＼は秋の紅葉のいろ／＼なるにも優りて、變化多く、生氣に富み、且つ趣味に富めり。もし細かに一樹一葉の趣味特色を説かば、小園の貧寒なる草木について云ふも、猶ほ浩瀚なる一書をなすべし。ワーズワースは人をしていろ／＼の樹の枝を揺り動かさしめ、その風



にさやぐ葉ずれの音によりて木々の名を云ひあつるを樂みとし  
 又誇りとしたりと云ふ。かくの如き微妙なる感覺ありて、彼れ  
 の新らしき自然詩は成れるなり。

理學の教ふる所によれば、色は物自體に存するにあらずして、  
 物の光線を屈折する種々相が、人間の目に赤く、青く、黄に、  
 紫に見ゆるなりといふ。さらば樹々の葉は同一の光線をいろ  
 く屈折放散して吾等に千淡萬濃の色彩美を樂ましむるもの  
 なり。彼等は光の貯藏者にして、同時に精巧無比なる分配者な  
 り。彼等は雨露の吸收者、貯藏者、防止者にして、同時に親切  
 なる供給者なり。風塵の受容者、遮止者にして、同時に優美な

る瀟過者なり。且つ彼等はよく無中に有を生じて、枝葉の翫る  
 所に千様萬様の音楽を奏せしむ。偉なるかな。妙なるかな。

箒を杖にしてしばらく樹木枝葉の功德を思ふ。何事にも業々  
 しき列擧を好む佛者は、掃地に五勝利ありとて、一には己心を  
 清淨にす、二には他の心をして淨からしむ、三には諸天歡喜す、  
 四には端正の業を植う、五には命終の後當に天上に生ずと數へ  
 たり。此の筆法にて埒外の諸天や命終の後まで數へ擧げなば、  
 わが樹木の功德やいばかり多からん。

筆とりて一字書きては新緑を三たび眺むる昨日今日かな。  
 花ゆゑに讀まず書かず過しぬる月日積りておもさ心哉。



此の新葉萬彩の錦はやがて陰鬱なる五月雨に染められて、青一色の天地と變はり候べし。それまでは吾等に取りて一年の中の最大歡喜の季節に候。不盡。

其の三 粟三粒

今日驟雨の最中、越後高田なる友人の來訪に接し候。御土産は片貝名物の羊羹と「衣がや」とに候。御土産の列擧は乞食の吹聴の如く、又遊藝の師匠の二季の床の間のやうに候へども、御みやげはやはりいつも嬉しく候。名物の御みやげは殊にうれしく候。まづ鹽の炒豆にて番茶を喫し、それから焼酎を置き、「酒

を置き」と云へば句が熟し候へども、事實は枉げ難く候。玄米の飯をたべて別後の情を叙し候。

東京は二十日間の日照りに苦めぬかれて、再昨やうやく甘露の微雨に接し、昨日よりは決瀉式の大暴風雨に少々面喰はせられ候が、北國も同様再々昨日までは連日微雨だになかりし由、而してこゝに面白きは十數日前、片貝の老酒舗佐藤といふに白髮童顔の不思議なる老人來たり、風呂敷を出して酒を要めたり。番頭嘲りて「風呂敷に酒の入るべきか」と云ひたるに、老人はからりと笑ひて「入るか入らぬか先づ入れて見るべし」といふ。不審ながら漏斗より移すに半滴も漏ることなし。主人怪し



みて人をして後をつけしむ。老人は山の方へと志しけるが、麓にて立ち止まり、顧みて後をつけたる男にいふやう、「折角こゝまで従ひ來たることなれば、苦勞がひに言ひ聞かすべし。是れより炎天のつづくこと三十日ばかり、其の後大風、饑饉、争亂いろくの禍あるべし。もし其の災厄を免れんとならば毎日粟三粒づつを食へ。」とて姿を隠せり。それより後、高田片貝邊の民競つて日毎に粟三粒を食ふといふ。面白きことに候。但し此の一兩日來東京を襲へる低氣壓が、北海をも襲ひて、車軸の大しめりはなかりしか、床しきは是れに候。

同じ人の話に、新潟より西の方の沿岸に寺泊、出雲崎、石地、

柏崎と相並びて、いづれも有名なる漁場なるが、各々他を揚げて自ら誇らざるが不思議なり。長岡の人は「魚は石地に限る」といふ。石地にては、「土地の魚はだめだ、柏崎に限る」といふ。柏崎にては「出雲崎が本場なり」といひ、出雲崎にては「寺泊にはとても敵はぬ」といふ。何處にても身最負、國自慢をするが常なるに、是れは不思議の事なりといへり。同じ人の説に、是れはいづれも同様にして甲乙なしといふ事か、或は自ら傷つけられじとて他を揚ぐるものかと申し候。とにかく面白く候。

故紅葉山人は北海の魚は肉硬くしてまづしいひける由、しかし越後の人は荒海の波濤と闘ひて肉のしまれる北海の魚を日



本第一と心得居る由に候。労働する者が筋肉の堅さを誇り、貴族優倡の徒が羽二重肌、菟肌、蕨肌の柔かなるを誇る類に候べきか。世の中は面白きものに候也。以上。

#### 其の四 睡蓮

此の春さる友達より睡蓮の珍種を貰ひ受けて、徑一尺五寸ばかりなる素焼の鉢に植ゑおき候處、日を追うて發育し、昨今は日毎に一輪乃至三四輪の優しき花を見せ居り候。烈日カンクと照りはたゞきて、なべての草木の打萎れ居り候折に、此の花のひとり涼しき笑みの眉を開きたるを見る、すがくしさを愛く

るしさ何にか譬へん。

睡蓮を育つる興味は、最初の一葉の水に浮かぶ時に始まり候。唯だ見る一塊の泥土、水の底に横たはりて膠々盤々たり。誰れが這裡に目を新たにする百千の花葉を藏することを想ひ候べき。さるほどに春暖の加はると共に、此の泥土に生のうごめき見え始めて、やがて其の間より蝸牛の角の如き數條の芽生ず。其の芽、長ずるに従ひて、尖頭の部分やゝ太くなり、やうやくにしてつぼめる葉の形を現じて水面に現はるゝや、忽ちバラリと開けてペタリと水上に浮かぶ。盆の如く、クラゲの如く、朧夜の月影とも見るべく、小さき蛙の圓座とも稱すべし。かくて今日一



葉、明日二葉、五葉、八葉、圓盤の數日毎に加はりて、海中の連珠島の如く見ゆるが中に、やがて一本の花莖長く水面を抜いて、其の尖頭に彫刻の如き小蓮花を開く。その美しく、品位ありて、而もたよりなげに情々しき様は、あたりに友わりやと願みるが如く、水面を高く離れたるを危ぶむが如く、眩しき日に照らし出だされし己が美容を羞づるが如く、而して水上の光澤ある圓き葉は空中の美花に對して競つて鏡面を捧ぐるに似たり。鉢の中の小天地の景致、うるはしとも面白しとも申すも愚かに候。一たび花を着けたる後は、晴天なる限り連日二三輪を見せざることなくして十月の半ばに至り候。一年の三分の一を領して

而も常に鮮かなる姿を現はすこと、百日紅其の他の命長き花の末葉の恥多き類ひにあらず。一花の壽命は二日を常とし、朝八九時の交に開きて午後の四時前後に閉づ。閉ぢたる姿は小さき鰻の頭の如く、再び翌日の朝陽を迎へて開き、二日目の夕方に至り、長へに閉ぢて、やがて力なき頭を水中に没す。終りをよくする、亦此の花の一徳と申すべきか。

こゝに此の花に附屬して御耳に入るべき一話あり。小生初め睡蓮を植うる時、一緒に三つの鉢を求めて、草を植ゑ、石をおき、或は金魚を放ちなど致し候ひしが、他の二つの鉢は五日七日を経れば薄濁りして、水面にドロ／＼のわたを浮かべ候に、



睡蓮の鉢のみは日を経月を越ゆれども、清明澄徹にして少しも濁ることなし。小生初め家人等皆々不思議の事に思ひ候ひしが、よくよく取調べ候處、是れは贈主の花友達が曾てアメリカより取寄せたる澄水草の根が蓮蓮の根に附着し來たれるが爲めに候ひき。此の草、細莖狭葉外観の甚だ振はざる小草に候へども、一種特別なる化學的分解の作用ありて、其の濁水を澄ます力は世界第一と稱せらる。もとアメリカのどこやら陰濕なる地方にありしものなるが、ふと植物學者の目にとまりて、廣く世界に恩澤を及ぼすに至りし由。我が臺灣に曾て濁水のウザヤヤ〜せる濕地あり、マテリヤの流行地として名高かりしが、此の水

草を植うるに及び、全く此の病の跡を絶ちたりと申し候。

造化は人のわろき施主の如し。一方に病苦を課すれば、必ず一方に之れに應ずる藥を備へて、しばらく之れを隠しおき、人智を試みて後に之れを與ふ。世に不用なるものなし。物には必ず二重、三重、五重、百重の意義あり。諺に「浦の濱木綿の百重なる如し。」と申し候へども、理趣の重疊層累せること、豈に濱木綿に限り候はんや。不一。

かん〜と照る日をあびて水の面に

さめたる如く睡蓮の咲く。

ぺた〜と水に浮かべる葉の間より



一くき長く睡蓮の咲く。

女性的彫刻的の睡蓮の

ばつちりと咲けり花首長く。

### 其の五 みそさしい

今日學校にて小鳥飼に苦心せる某外人の話に耳敏て候處、小鳥の中にて最も飼ひにくきはみそさしい(溝鶴鷄)にして、次ぎは鶯に候由、而してみそさしいの飼ひにくきは第一に其の餌づかざるにあり、而して之れに餌づかせる方法は鳥飼専門家が秘中の極秘にして、そは其の餌の中に少許の人糞を混ふるにあり

と云ふ。尾籠ながら面白き話に候。人糞以外何物の排泄物も駄目なりと云ふに至つては、更に面白く候はずや。造化の與ふる最適の妙薬は最も手近き所にあり、而して最も手近き所が甚深極秘の妙諦のひそむ所に候。「秘事は睫毛」とは、よくも申しけるものかな。

### 其の六 孟宗

昨日近處の友より孟宗二本を惠まれ、早速門脇の東北隅なる小封に安堵せしめ候。直く、太く、青く、節間の遠き氣高き姿は、例の如く暢びりした心持を與へ候へども、「二本」といふ偶



數の、いかに置きかへ移しかへても安如たる落附を見せざるが  
遺憾に候。止むを得ずしばらく此のまゝにして來春の筈を待ち  
候べし。不如意に安んずるも亦人生の一興に候也。

二本の孟宗うゑぬつくく見て

いま一本のあらばとぞ思ふ。

### 其の七 梅 雨

造化豫定の年中行事ながら、此頃の降りみふらずみには御同  
様くさく致し候。この間に於ける慰めは苺と紫陽花とに有之、  
花の如き苺の去らんとして、果實に似たる紫陽花の之れに代は

らんとするは殊更面白く候。苺の粒々は紫陽花の花に似候はず  
や。紫陽花の粒だてる大塊りは苺の赤を紫にしてパイナップル  
大にしたるやうには候はずや。水々しき似た者同士の、季節に  
於いて相隣接せるも面白く候はずや。

花の如き苺は過ぎぬ實の如き

あぢさゐ咲きぬ五月雨にして。

五月雨を何にたとへん陰氣なる

勉強家かも、しふねき雨よ。

苺すぎて茶も菓子もしばし力なし。



## 其の八 金魚

今日は快晴に候まゝ、子供をつれ、金魚屋にまゐりて、二十  
 數尾を求め來たり、三つの鉢を掃除して分ち入れ、庭簷下の  
 あちこちに配置いたし候。狭き金魚屋の枿池にごちやくくに飼  
 ひおかれ候ものとして、わづか徑一二尺の小湖水を大池のやうに  
 泳ぎまはるもいぢらしく候。

子をつれて金魚買ひけり白五つ

赤は九つ更紗十一。

三つの瓶に金魚放ちぬ石いれて

水草浮けて切麩あたへて。

午後は四阿の額掛けに大半を費し候。木額、陶額の二枚にし  
 て、一つは農友撃壤庵主の與へられし大利根川の古船板の斷片、  
 一つは奥州白河在の殘夢翁の與へられしつれづれ焼に候。

鍬を取り筆を取る手に槌とりて

額をかけたたりたのし半日。

一枚は牛飼ふ友がわかちてし

古船板の黒う光れる。

一枚はみちのくの友老いの友の

手づから焼けるわびのつれづれ。



## 軍艦なる甥へ

二十日間の照りつけに五日の降りづめ、さんざ大地を乾割れさしておいて据風呂をぶちまけたやうな續けびたし、お天道様の御政事向きにも聞こえぬ事が多いとつくづく思ふ。さて此の降りをば、お前は何處の海の上で迎へて居る。伊勢の海てか、熊野沖てか、遠州灘てか、それとも山田鳥羽の神風の吹く所てか。こちら皆無事、去る七月二十一日に子供等を郷里にやつてから、廣い家になつた二人、鼠に引かれさうな生活をしてゐる。庭に水をまいては藤村、虎屋で御茶、裸かせぎに汗を流し湯を

浴びては、新ファンに替へて泡の立つ惠比壽、サツポロ、その間に讀んだり、書いたり、謠つたり、寝たりを適宜に織りませて、例の五十グラムを限つた猪口三つの晩酌に、陶然として鳥と共に御しづまり。これが此の頃の私共の日々の生活です。違約の舊怨はもうすつかり忘れて、新しい待焦れの念のみが熾んになつて居る。今度は騙さずに訪ねて来て、中年夫婦の淋しい塀を賑はしてくれ。藝なしてはあるが、此の赤い心を持つた叔父叔母を呂昇や天勝に見かへて呉れては困るぢやないか。遠からぬ中思ひがけぬ處で逢ふかも知れない。横須賀入りを、お前の名の千秋と待詫つゝ、巢鴨の叔父より。



## 留守に音づれし友に

優曇華の花さく如き出不精者の稀の旅が、いかにして御耳には入り候ひけん、張耳飛目、惡事千里、惡い事は出來ぬ世としみづく致し候。遠路わざくの御越し、話に餓ゑて友戀しき折柄なりしを、生憎の外出、しかも御影とすれ違ひて歸宅致し、辻町までの其の邊にて御目には懸らざりしやと問はれ候次第、此頃の遺憾今日の午後に集め申し候。其の中是非改めて御入り下されし。小生も遠からず例の稽古に肉耳を肥しかたぐ御邪魔して心耳の洗滌を願ふべく候。悔しさの御披露まで、匆々。

## 乳蜜郷牧場主へ

舌代。只今遠來の客あり、食談の序にお宅の牛乳の精良なる事を話し候處、早速拜味致度との希望に候。御都合叶ひ候は生乳二三合及び變酸乳少々直ぐに御届け下さるまじくや。蒸殺無菌のいたづら乳に對する生乳の功德、變酸乳の有難味を實物教授によりて示したく、御厄介御願致すにて候。匆々。

## 犬の下痢どめの問合せに答ふ

覆啓。お尋ねこしの犬の下痢どめは、小豆に胡蘿蔔を入れ、



どろ／＼に煮くづして食べさせるのです。早速ためして御覽なさい。是れはもとの將軍家に仕へた名老醫堀本義明翁の口傳で、私共でも此の妙劑で愛犬の命をとりとめた事がありました。御返事まで。

### 玄米御飯の炊き方を問はれしに

(主婦より)

御手紙拜見致しました。今度玄米を御はじめになるについて御尋ねて御座います。私一人の經驗を申し上げれば、ざつとこんなもので御座います。

玄米一升に就いて申せば、先づ冬ならば一晝夜以上、夏ならば一日位水につけておき、さて炊く時に、普通の白米の加減に仕かけた中へ三合程多く水を入れます。そして白米と同じやうな加減で強い火を中てます。二十二三分も立ちますと、糊が吹き出てまゐりますから、そこをきつかけに火を少し弱めて、そのまゝとろ／＼と炊いて大抵に水が乾いた時分に火を引いて、残り火でそのまゝ三十分程むらします。白米のやうに、煮立つと間もなく火を消しては、とてもふつくらしたお飯が出来ません。玄米は其處の加減が一寸むづかしいのですが、少しの御經驗ですぐおわかりになります。それから薪火と瓦斯とは、炊



き方の趣が自然ちがひます。宅では瓦斯で炊いて居りますが、瓦斯は薪火と違つて火を消してから後は、竈の熱が長く保ちま  
せんから、いくら長く炊いて大概乾いた時分に止めるので御  
座います。炊いて居る時間は、冬は四十五分、夏は四十分位で、  
宅では印を押したやうに自然と極つて居ります。

玄米は三四日水に漬ければならぬとか、一日に三四度づつ水  
を替へねばならぬとか、釜の縁に布巾をわけて蓋をした上に重  
石をあげるとか、或は米をうるかした其の水で炊きあげねばな  
らぬとか、糊を吹き出さしては折角の滋養分がなくなる譯だ  
か、いろいろと御経験になつた理想の炊き方を、御発表になつ

てゐる御方もありますが、しかし三四日水に漬けるとすると、自  
然その爲の桶を三四個備へなければなりませんし、雑作のない  
事のやうですけれど、布巾を釜にあて、蓋に重石をするなど  
は、年百年中の事となると、何んとなく面倒にも思はれますし、  
又二三日水につけた其の水で炊く事などは、氣持がよくありま  
せんし、とてもさうした實行は出来さうにもありませんから、  
私は成るべく簡單にといふ趣意で、前のやうな炊方を致して居  
ります。それで近頃は、自分丈では殆んど理想と思はれるほど  
に炊けるやうになりました。

白米の倍の時間をかけて炊くことでは、經濟の方から考へて



非常に損になるなどと、一二度御實驗なされた方の仰せてありましたが、私は決してそんな事はないと思ひます。玄米は特等米が白米の凡そ三等米の値段で買へますから、決してさう不經濟なことはありません。まあやつて御覽なさい。御身體にもさつと御よろしいかと思ひます。白米を食べて居る御方でも、年中御丈夫な方は澤山ありませうけれど、私共では玄米を食へ出してから、家内中に病氣する者がなくなりました。私共では、これは屹度玄米の御かげだと申し合つて居ります。もとらぬ筆で簡單に書き記しました。御解りにくい所がありましたら、また御遠慮なく御尋ね下さいまし。御返事まで。

### 宮城縣角田の友に

先日は御端書有難う。毎日砂ほこりを飛ばす烈風の空梅雨には、降りづめのじめ〜にもまさりて閉口致し候。御攝養御息りあるべからず。

空梅雨や五月に雨を望みけり。

こんな事を書いた處へ氣持のよい御しめりが沛然とやつて来ました。支那の「時雨」といふ語は、降れかしと思ふ時分に降る雨といふ意味なさうですが、今日の雨はほんとに文字通りの時雨です。



新緑の錦はいつか解けあひて

青一色の五月雨の空。

雨を帯びてたゆげに見ゆるあぢさゐの

花くびおもく地に垂れんとす。

濃緑のうちに數點柘榴の

雨夜の星と咲けるうれしも。

築山の裾をめぐりて紅の

さつきのつゝじ今さかりなり。

いづれも即景即興です。御一笑を願ひます。

いつの間にか口語體、候體、雅文體があやに絡んでしまひま

した。わざと書き直さずに差上げます。時代の傾向の勢力は恐ろしいものとお笑ひ下さい。左様なら。

### 五色温泉に湯治中の友へ

お宅から、飯坂から、追つかけて五色からと、面白き繪はがき次ぎ／＼に御送り下され、毎日うれしく拜見致し候。吾妻山の奥に分け入りて、將に高からんとする秋の山氣を呼吸し給ふこと、塵の都に職業しぱりされ居る吾々には近來の羨望に候。御相應にてゆる／＼御湯治祈上候。

御承知にも候はん、私は米澤生まれにて五色には三度入浴致



したる事有之、宗川の客室もあちこち轉々致し候へば、或は、會て私の占めたる室が御占領の榮を擔ひしやも知れずなど考へつゝ、あの幽邃なる山腹の温泉を床しみ居り候。只だ床しからぬは五色あたり年々の都化俗化に有之、小生なども最初にはれ込みたる名湯が一度毎にいやになりて、最後には再び訪はじと思ひたる位にて候ひき。今度のゆくりなき御入湯に對しても、故郷の醜惡なる一面が御目にとまる心苦しきなど思ひ出でて、悲喜交々いたし居り候。

私が最後の五色入湯の折の紀念は、大西先生の西洋哲學史の校正をなしたる事、同温泉俗化の様子を綱島梁川氏に書き送り

て、同氏に慰められたる事などに有之候。

御惠みの吊橋の繪葉書を見て、あゝ五色も大分開けたなと思ひ候。人間を高見して悠々山靈と御親しみあるべし。山小さく、谷狭く、瀧布もなければ、樹木と空氣と雲とは自然に飢うる者の心を慰むるに足るべく候。

いろ／＼の事に床しき五色かな。

豆腐鯉くりかへしたる五色かな。

汽車來ずばかゝらじと思ふ五色かな。

### 角田の友に



御恵みのゑはがき面白く拜見。今年の秋は暖かいと云つて居る中に、もう庭の苔が霜に枯らされ日にへがる、冬になりました。兩三日前からは、もう屋外の水瓶に薄氷が張つて居ります。向寒の折にも御壯康何より御芽出たう存じます。

この頃萬葉に御耽りの由、復古的御儀の行はるゝ時節柄、何ほどか御感興の深いことでありませう。私は今の大御代を思ひ、而して萬葉を思ふ毎に、いつも犬養宿禰岡麿が

御民われ生けるしるしあり天地の

榮ゆる御代に逢へらく思へば。

の歌を思ひ、そして胸一ぱいに歡喜の情を湛へます。折角御勉

強なさい、そして大和民族の大昔の心情を御味はひなさい。

御自愛を祈ります。

三保の松原に滞在せる友に (主婦より)

度々の御たよりうれしく面白く拜見いたしました。俗離れした三保の仙境に静かに起臥して、ほしいまゝに大自然のさゝやきを御聴き遊ばすこと、如何ばかり御羨ましく御座いませう。早くその御聞きになつた微妙の天音を自由に大膽に發表なすつて私共俗人の耳を洗つて下さるやうに、首をさしのべて待つて居ります。私共は相變はらず巢鴨村の半百姓で、三百坪の小



さいく小自然せうしぜんに閉ぢ籠こもつて、花はなが咲いたの、芽めが出たの、苔こけがむしたの、鳥とりが鳴いたのと云いつて、有頂天うちやうてんになつて樂たのしんで居をります。暢氣のんきに氣きを持つてゐる爲ためて御座ございませう、幸さいに皆丈みなぢやう夫ぶて御座ございますから、どうぞ御安神下ごあんしんくださいまし。今度こんど御歸京ごききやうになりましたら是非東海道せひとうかいだうの春はるの御旅ごたびの御印象ごいんしやうを委くはしく御聞ごきかせ下くださるやうに願ねがひます。

御禮おれいをかね御無沙汰ごぶさたの御わびまで、かしこ。

### 御即位式の當日をいかに

過あやごすかと問とはれしに

成なるべくわざとらしい事ことをせず、濁にごりの少すくない一日いちにちを送おくりたいと思おもつて居をります。先まづ家の内外ないぐわいをきれいに掃除さうじして、それから湯ゆに入はいつて、餅もちをたべて、御茶おちやをのんで、しづかに「高砂たかさご」の一節ひとふしでも謠うたひませう。出で来るならば都みやこの塵ちりの及およばぬ閑静かんせいな境さかひに行ゆき、萬歳ばんざいは松風まつかぜに任まかせ、旗提灯はたぢやうちんのかざしは紅葉もみぢに頼たのんで、清きよい山やまと澄すんだ水みづとを眺ながめつゝ、黙だまつて皇運くわううんの無窮むきゆうを祈いのりたいと思おもつて居をりますが、とても出で来きさうもありません。わざとらしからじと願ねがひつゝ、極きはめてわざとらしい山入やまいりの奉祝ほうしゆくを空想くうさうするところなど、低能ていのうな村農のうそんの矛盾むじゆん的てき愛嬌あいけうと御笑おわらひ下ください。御返事おんへんじまで、匆々さうさく。



## 御大典の翌日友へ

御大典紀念の美はしき御たより、幾重にも有難う存じます。私も御同様有難い日をめてたく送りました。朝は休みらしくゆつくりと寝ね、例より遅く起きて家の内外をきれいにし、それから辻町に行き國旗を買つて来て新舊の二旒に門を賑はし、それから紅白の餅を搗き、澤の鶴に頬を染め、大切の十三個に鼓腹して學校へ出かけ、三時半に萬歳を唱へて、歸つてから、家内總出て、馬場先の萬歳門から鍛冶橋を経て銀座通に出て、白木、三越前のゴミを遺憾なく吸つて、九時半といふに歸宅致し

ました。

我が家の古い國旗は明治十四年明治天皇東北御巡幸の砌り、丁度私が始めて小學校に上つた年に、母の作つたものであります。其の後三十五年の風雨にさびて、百戦の塵を浴びた聯隊旗のやうに、褪せた色と無数の負傷との痛ましい誇りに光つてゐます。之れと相並べて紅白二色のくつきりと鮮かな新國旗をかざした心持は、實に云ふにはれぬものであります。私は此のめてたい一日を位記勳管に輝いた大人達と共にせず、國民大多數の平民に伍して祝ひ奉つた事を衷心から有難い仕合と存じます。



餅つきて鼓腹萬歳の御慶かな。

## 柿

我が家の庭に六本の柿がある。

その一本の名は、「衛門」と云つて、澁柿の中の大將株と云はれるものである。普通樽柿にするのが是れて、若い中に澁を抜けば、サク／＼と齒がかりのあるのが食はれる。やゝ年とつたのをさはせば、モヤ／＼と柔らかいのが食へられる。霜に飽かして黒味を帯びるやうになつたのをもいて来て、棚に並べて澁の



抜けるのを待てば、甘露の凝つたやうなのが啜られる。一番うまいのは此の甘露の凝つたので、かういふのになると、固い果實が液體に近づいたといふよりは、寧ろ仙家の濃漿が凝り固まつたといふ尊い味はひがある。一啜りして咽喉から佛になりさうな心地がする。

私が此の木を植ゑたのは明治四十年の秋であつた。高さはやうやく一間餘り、幹は子供の腕ほどのものであつたが、何となく萎縮けたやうで、枝も伸びず花もろく／＼咲かず、従つて實も結らない。もどかしさに枝先を折り込みなどして生氣の回復するのを待つて居る中に、新らしい土地に縁づいて固くなつた

しこりが、段々ほだれて來たと見えて、三四年目から盛んに花を附け出して來た、而して一昨年は、申譯のやうではあつたが、とにかく一個の大きい實を結んだ。それが去年は二十幾個を結ぶやうになり、今年は大飛びに飛んで、百以上の花より美しい實を見せるやうになつた。

凡そ果物の中で柿位人の心を動かすものはあるまい。薄い黄味を帯びた透き通るやうな新芽は、袖や帽子や箒木の觸るゝ度毎にポロリ／＼と缺ける。其の中に脆い、首の長い、白い花が咲く。やがて實が見えて、それが豆粒ほどになると、毎日掃く



やうに地に落ちる。それから慈姑大になり、鶏卵大になる變はり目變はり目には、豊富な秋を約束してゐた青い實が頻りに枝を離れて、ポタリくとみぢめな亡骸を地上に横たへる。秋になつて、もう大丈夫と胸を撫でおろして居ると、やがて八朔、二百十日の大暴風雨が襲つて来て、大きくなつた實を容赦なく枝共に挽ぎ取つて行く。赤い姿を枝先に現はして人の目を悦ばすやうになると、今度は其の美しい色が鳥の目を惹き、悪太郎の心を引いて、無残な嘴や石ころに傷つけられる。

わづかに一個二個でも、半年の間に續いて起くるかやうな災厄を危ふく免れて私共の手に入り、口に入る一個二個である。

その一個が、一年にして二十個となり、又一年にして百個となるのを見る喜びを何に譬へやう。つれづれ草の兼好法師は「此の世のはだし有たらぬ身に、たゞ空の名残のみぞ惜しき。」と云つて居る。私は世のはだしも澤山に有つて居るが、空の名残、自然界の名残、殊に手しほにかけた草木の名残は、取りわけ私に取つて盡させぬ未練である。「柿の未來を考へる丈でも死なれない。」私が茶飲話によく云ふ戯言は、實は腹の底から湧き出でる眞の我の聲である。

一本の名は「鶴の子」である。これは實の形や大きさが鶴の



卵たまごに似にて居ゐるからの名なであらう。或あるは其その色いろが、あの品ひんのよい大鳥おほとりの丹頂たんちやうに似にてゐる爲ための名なかも知しれぬ。或あるは其その形かたちが、嘴くちばしを縮ちぢめ、翼つばさを收まめ、足あしを隠かくした長丸ながまるい圖案式づあんしきの鶴つるに似にて居ゐる爲ための名なかも知しれぬ。

此この柿かきの特色とくしよくは早熟さうじやくの點てんにある。堅かたい齒はざはり、水氣みづけの乏とほし味あじはひ、いづれも人ひとに舌鼓したつみをうたせる程ほどのものではないが、九月ぐわつに入はいる匆々瓜さうくわに次つぎ無花果むいかくと並ならんで秋あきの味あじの先駆さきがけをする所ところに、他たの後詰ごづめの優秀者いうしゆうしゃの及およばぬ値打ねうちがある。青あをいながらに熟じやくして高たかい秋あきの眞味しんみを暗示あんじするところや、こましやくれた相貌なまりをして旗持はたもち、喇叭吹らっぱふきの役やくを勤つとめるところなども、謂いはゆる新人しんじんの生せい

活くわつを象徴しやうちゆうしてゐるやうに見みえて、何なんとも云いはれぬ面白おもしろさである。我わが「鶴つるの子こ」は衛門ゑもんと一緒しよに四十年ねんの秋あきに買かつたので、もとは大人おとなの親指位おやゆびぐらゐのものであつたが、翌年よくねんから花はなを持ち、その翌年よくねんには數個すうこの初生はつなりを見みせて、今いまではもう一年ねんおきに五十顆くわい乃至百顆ひやく以上いじやうを結むすぶやうになつた。年毎としごとにずん／＼とふとつて行くのを見みると、數年後すうねんごの未來みらいが待遠まちどほしさに胸むねも躍なをるばかりである。

鶴つるの子このお馴染なじみは同じおなじやうに未來みらいに富とんでゐる子供等こどもらで、皮かはごとにムシャ／＼としやぶる無邪氣むじやきな仲間なかまの喜よろこびは、常つねに此この鶴つるの子こに集あつまつてゐる。



一本の名は「禪寺丸」と云つて、黒砂糖式の甘味を持つた柿である。しかし其の黒砂糖式の甘味は、場末の菓子屋の餅菓子に見るやうな味ではなくして、京都式の凝りぬいた黒砂糖製の菓子に見るやうな味である。此の柿の極めたる味は、硬からず、とろけざる間にある。古代風の黒ずんだ赤味を帯びて、柔かいながらシナ／＼といふ手ざはりの丸々した奴に、皮ながら嚙り附いて、舊都式の甘味が齒に沿うて唇に流れ出るのを齧る時の心持は、實に類ひなき風味である。少し尖りめのタップリした丸い形、厚味のある古代風の赤い色、柿の中で最も柿らしい外

観を備へたのはこの禪寺丸てあらう。

一本の名は「縞御所」。是れは名なしのまゝて買取つたので、私共は偶然にも養ひ親、兼、名づけ親になることになつた。形は蜂屋そつくりで、蜂屋よりは少し小さく、皮に美しい青みがかつた縞があり、そして甘露を齧るやうな味はひは品のよい御所柿そつくりである。年々の数は極めて少ないが、色と形と味はひとの三方面に於いて、類ひなき高尚な趣味を見せて呉れるのは是れである。

私他日、植木屋から、或は果物屋の店頭から、或は書物か



ら、此の柿の本名を知ることがあるかも知れぬ。けれども少なくとも我が庭に於いては、長く「縞御所」の名を改めたくないと思つて居る。

一本の名は「妙丹」と云つて、私の家では「梨柿」とも呼んでゐる。黄味の勝つた赤色で、平たい、大きい、尖頭の窪んだ、そして熟すれば笑み割れるといふ特色を有つて居る。味はひ盛りは、張り切つてまだ笑み割れぬ境にある、硬性が極度に發達してまだ柔性に轉ぜざる頃合にある。ナイフを當てればパリツと弾んで割れ、齒に掛けるとサク／＼と梨子を食ふやうな音が

する。而して多量の水氣を含んで、和三盆のやうな上品な甘味がある。色といひ、形といひ、味といひ、禪寺丸や衛門や縞御所とは全く反對してゐるが、同時に他の種類の全く真似られぬ特殊の風味を持つてゐる。柿の中の最も柿らしからざるものであるが、而も捨て難い味はひを有つたものは是れである。

三四年前、今上がまだ東宮におはした時に、此の柿を好ませられて、遙かに濃尾地方から御取寄せになつたとかいふ事を聞いたことがあつた。我が庭に養はれて、やんごとなき新らしい縁故を有つて居るのも、また此の柿である。